

大友府内23

中世大友府内町跡第112次発掘調査

—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016

大分市教育委員会

大友府内 23

中世大友府内町跡第112次発掘調査

－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2016

大分市教育委員会

序 文

本書は、大分市教育委員会が集合住宅建設工事に伴い実施しました中世大友府内町跡第 112 次調査の報告書です。

中世大友府内町跡は、大友氏館跡を中心として大分川左岸地域に展開する豊後国守護大友氏の拠点であり、第 21 代大友義鎮（宗麟）の時代には南蛮貿易の積極的な推進によって国際貿易都市として栄えました。これまでの 110 地点を超える発掘調査によって確認された多くの遺構や多彩な遺物から、国際色豊かなまちの様子が次第に明らかになっています。

今回の調査地点は、中世大友府内町跡の最盛期の姿が描かれた「府内古図」によると大友氏館の北側に位置する「御北町」の一角に該当し、調査区の南側隣接地では、大友氏館の北側外郭施設と思われる積土状遺構や溝状遺構が確認されています。調査では、掘立柱建物跡や廃棄土坑のほか、土地の区画を示すと思われる溝状遺構が発見されました。また、大友氏館成立以前の時期に該当する土師器を一括廃棄した土坑が良好な状態で確認されるなど、新たな知見を得ることができました。

本書に収録されたこれらの資料が、学術研究のみならず、地元の皆さんとともに多くの方々の文化財愛護への理解を深める一助となり、歴史教育・学術の振興に幅広く活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行にあたり、ご配慮・ご協力を賜りました株式会社アライアンスおよび関係者各位に対しまして、心よりお礼申し上げます。

平成 28 年 3 月 25 日

大分市教育委員会

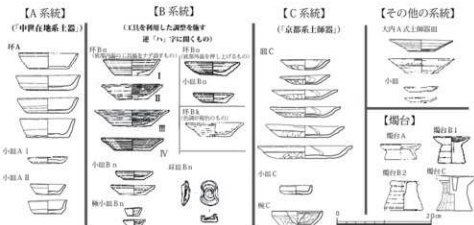
教育長 三浦 享二

例 言

- 1 本書は、大分市教育委員会が大分市御徳町3丁目において集合住宅建設工事に伴う発掘調査として、平成27年度に実施した中世大友府内町跡第112次調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、株式会社アライアンス（代表取締役：中垣昌康）からの依頼を受け、大分市教育委員会が実施している。
- 3 発掘調査は、大分市教育委員会文化財課（調査担当：松浦憲治・留野優兵）の委託を受け、株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：松浦智）が行った。
- 4 発掘調査における遺跡の掘削及び調査記録作成業務については、大分市教育委員会文化財課の委託を受け、株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：松浦智）が行った。
- 5 遺構の実測・写真撮影は、株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：同上）が大分市教育委員会文化財課の委託を受けて行った。調査区の航空写真撮影は、株式会社九州文化財総合研究所の依頼を受け、東亜航空探検株式会社がを行った。
- 6 遺物の1次整理作業（接合・注記）は、株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：同上）が大分市教育委員会文化財課の委託を受け実施した。
- 7 報告書に掲載した出土遺物の実測・製図は、株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：井上素裕）が大分市教育委員会文化財課の委託を受け行った。
- 8 配置図・全体遺構図・個別遺構図の製図は、株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：同上）が大分市教育委員会文化財課の委託を受け行った。
- 9 総括図版の作成・製図作業は留野優兵（大分市教育委員会文化財課嘱託）が行った。
- 10 遺物写真撮影は、大分市教育委員会文化財課の委託を受け、株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：同上）が行った。
- 11 本書の執筆は以下のとおりである。
第1章 池邊 千太郎（大分市教育委員会文化財課）
第2章 井上 素裕（株式会社九州文化財総合研究所）
第3章 同上
第4章 留野 優兵（大分市教育委員会文化財課 嘱託）
- 12 本書の編集は、大分市教育委員会と株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：同上）の双方の企画の下、株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：同上）が行った。
- 13 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター（大分市大字田原337番地の5）に収蔵・保管している。
- 14 報告書の作成業務については、「大分市埋蔵文化財発掘調査報告書作成指針」に基づいて実施している。
- 15 発掘調査及び報告書作成に際して、以下の方々に御指導・ご助言を賜った。
小野 正敏（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構理事）、伊藤 正義（鶴見大学文学部教授）、金原 正明（奈良教育大学理科教育講座 古文化財学 教授）

凡 例

- 1 本書で用いた遺構記号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
① SB：掘立柱建物跡、② SA：棚状遺構、③ SE：井戸跡、④ SK：土坑・貯蔵穴、⑤ SD：溝状遺構、⑥ SX：その他、⑦ SP：ピット・小穴
- 2 本書に用いた方位は全て座標北（G.N.）である。座標は、世界測地系の平面直角座標Ⅱ系のX・Y座標を基点として表記している。
- 3 本書に掲載した遺構配置図の表記は、新旧関係を線で示し下位の遺構については点線で記している。また、表記上遺構の新旧関係が不明瞭な場合は、矢印で補足している。
- 4 遺構の規模と深度の単位はメートル（m）で、遺物の法量はセンチメートル（cm）で表記している。
- 5 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
① 遺物断面が里壁りのもの…陶器・須恵器・須恵質土器
② 遺物断面が灰色のもの…瓦質土器・瓦器・瓦類
③ 遺物平面の稜線と調整の変換点…実線
④ 調整が同じでその単位が分かるもの…長破線
- 6 本書に用いた出土土器の分類は以下の文献による。
【陶磁器】 太宰府市教育委員会 2000『太宰府桑坊XV—陶磁器分類編—』
小野正敏 1982『15～16世紀の染付陶・皿の分類と年代』『貿易陶磁研究』No.2
上田秀夫 1982『14～16世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶磁研究』No.2
森田 勉 1982『14～16世紀の白磁の分類について』『貿易陶磁研究』No.2
【陶器類】 栗岡 実 2005『備前』『全国シンポジウム中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年資料集』
【中世須恵器】（東播系）森田 勉 1995『中世須恵器』『概説中世の土器・陶磁器』真島社



目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の成果	5
第1節 調査の概要	5
第2節 基本層序	6
第3節 主要遺構	10
第4節 出土遺物	28
第Ⅳ章 総括	50
第1節 時期別の遺構変遷	50
第2節 周辺調査区との比較	53
第3節 まとめ	54

図版目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2	第19図 第2面遺構配置図 (1/200)	24
第2図 調査地点位置図 (1/10,000)	3	第20図 第2面全体遺構図 (1/200)	25
第3図 周辺調査区配置図 (1/500)	5	第21図 SK080・SK085 遺構実測図 (1/40)	26
第4図 土層模式図	6	第22図 SD060 遺構実測図 (1/40)	27
第5図 調査区西側西壁土層図 (1/80)	7	第23図 SB090・100・105・110・115 SE070	
第6図 第1面遺構配置図 (1/200)	8	SK005・010・015・020 出土遺物実測図 (1/4)	29
第7図 第1面全体遺構図 (1/200)	9	第24図 SK020・025・030・035・040・040(075)・	
第8図 SB090 遺構実測図 (1/80)	10	040(204)・045・050・080 出土遺物実測図 (1/4)	30
第9図 SB095 遺構実測図 (1/80)	11	第25図 SK080・085・108・134 SD060	
第10図 SB100・SB105 遺構実測図 (1/80)	13	出土遺物実測図 (1/1・1/4)	31
第11図 SB110・SB115 遺構実測図 (1/80)	14	第26図 SD060・065・161・228	
第12図 SE070 遺構実測図 (1/60)	15	SP017・023・074・087・191・234	
第13図 SK005・SK010 遺構実測図 (1/40)	16	出土遺物実測図 (1/1・1/4)	32
第14図 SK015・SK020 遺構実測図 (1/40・1/30)	17	第27図 SX141 その他出土遺物実測図 (1/1・1/4)	33
第15図 SK025・SK030 遺構実測図 (1/40)	18	第28図 時期別遺構変遷図 (1/400)	51
第16図 SK035・SK040(075・204)		第29図 周辺遺構分布図 (1/600)	52
遺構実測図 (1/40・1/60)	19	第30図 調査区周辺模式図	52
第17図 SK045・SK050 遺構実測図 (1/40)	20	第31図 各時期遺物組成	54
第18図 SD065 遺構実測図・土層断面図 (1/60・1/40)	22		

目 次

第1表 遺構出土遺物一覧表①	39	第8表 遺構出土遺物観察表①	46
第2表 遺構出土遺物一覧表②	40	第9表 遺構出土遺物観察表②	47
第3表 遺構出土遺物一覧表③	41	第10表 遺構出土遺物観察表③	48
第4表 遺構出土遺物一覧表④	42	第11表 遺構出土遺物観察表④	49
第5表 遺構出土遺物一覧表⑤	43		
第6表 遺構出土遺物一覧表⑥	44		
第7表 遺構出土遺物一覧表⑦	45		

写真図版目次

写真図版1

- 調査区遠景（北西より）
- 第1面調査区全景（上が南）

写真図版2

- 第1面調査区西側ビット群完掘状況（上が南）
- 第1面調査区東側全体遺構写真（西より）

写真図版3

- 第1面調査区中央西側全体遺構写真（東より）
- 第2面調査区東側全体遺構写真（西より）

写真図版4

- 第2面調査区西側ビット群完掘状況（南より）
- 第2面調査区中央西側全体遺構写真（東より）

写真図版5

- SE070 東西土層（南より）
- SE070 掘削状況（南より）
- SK005 完掘状況（東より）
- SK010 完掘状況（北より）
- SK015 完掘状況（東より）
- SK020 遺物出土状況（東より）
- SK025 完掘状況（北より）
- SK030 完掘状況（南より）

写真図版6

- SK035 遺物出土状況（北より）
- SK035 完掘状況（北より）
- SK040（075・204）検出状況（南より）
- SK040（204）検出状況（東より）
- SK040（075・204）東西土層（南より）
- SK040（204）東西土層（南より）
- SK040（204）遺物出土状況近景（南より）
- SK040（075）完掘状況（東より）

写真図版7

- SK045 完掘状況（南より）
- SK050 完掘状況（南より）
- SD060 検出状況（南より）
- SD060 東西土層（南より）
- SD060 完掘状況（南より）
- SD065・SE070 検出状況近景（南より）
- SD065・SE070 検出状況近景（南より）
- SD065 北側ベルト東西土層（南より）

写真図版8

- SD065 南側ベルト東西土層（南より）
- SD065 完掘状況（南より）
- SK080 検出状況（南より）
- SK080 遺物出土状況（南より）
- SK085 検出状況（西より）
- SK085 遺物出土状況（西より）
- SK085 中央・南側遺物出土状況近景（西より）
- SK085 完掘状況（西より）

写真図版9

- 調査区中央北壁面東西土層（南より）
- 調査区西側西壁面南北土層（東より）
- 調査区西側西壁面南北土層近景1（東より）
- 調査区西側西壁面南北土層近景2（東より）
- 調査区西側西壁面南北土層近景3（東より）
- 調査区東側北壁面東西土層（南より）
- 調査区西側北壁面東西土層（東より）
- 調査区西側北壁面東西土層（南より）

写真図版10

- 第23図-7 / 第23図-18 / 第23図-26
- 第23図-28 / 第23図-35 / 第23図-43 外面
- 第23図-43 内面 / 第24図-1 / 第24図-9 外面
- 第24図-9 内面 / 第24図-15 / 第24図-22
- 第24図-23 / 第24図-28 / 第24図-30
- 第24図-31 / 第24図-47 外面 / 第24図-47 内面

写真図版11

- 第24図-58 / 第24図-59 / 第25図-2
- 第25図-6 / 第25図-12 / 第25図-24
- 第25図-25 / 第25図-30 / 第25図-31
- 第25図-41 / 第25図-42 / 第25図-44
- 第25図-54 / 第25図-55 / 第25図-56
- 第25図-59 / 第25図-60 / 第25図-61

写真図版12

- 第25図-66 / 第26図-6 / 第26図-7
- 第26図-15 外面 / 第26図-15 内面 / 第26図-16
- 第26図-17 / 第26図-23 / 第27図-3
- 第27図-8 / 第27図-11 / 第27図-12 外面
- 第27図-12 内面 / 第27図-21 / 第27図-22
- 第27図-24 / 第27図-26 / 第27図-27

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査経過

平成 26 年 6 月に、大分市顕徳町 3 丁目における、集合住宅建設計画に伴い、開発事業者から文化財課に周知の埋蔵文化財包蔵地の照会がなされた。開発予定地は、国指定史跡の大友氏館跡の北側隣接地に位置し、平成 13 年度に実施された遺跡の確認調査により、中世の大型の掘り込み遺構や区画溝、建物跡等が発見されている地点である。これまでの開発事業において、開発と埋蔵文化財の保護の円滑な調整を図るなかで、遺構保存を行ってきたところであり、こうした経過を事業者の説明するとともに遺跡の取り扱いについて協議を進めるなかで、事業者から埋蔵文化財調査費用の積算について平成 26 年 6 月 18 日付けで依頼を受けた。このため、確認調査結果を基に遺跡に影響を及ぼす範囲の発掘調査に要する費用積算を行い、6 月 23 日付けで事業者に提示した。

その後、開発事業計画が具体化し、事業者より平成 27 年 2 月 17 日付けで文化財保護法第 93 条の届出がなされ、遺跡の取り扱いについて、平成 27 年 3 月 5 日付けで大分県教育委員会教育長野中信孝より発掘調査の実施について指示が行われた。

これを受けて、事業者から埋蔵文化財調査費用の積算について、平成 27 年 5 月 1 日付けで再度依頼があり、設計図書を踏まえたより詳細な費用積算のための確認調査を同年 5 月 20～22 日に実施し、調査範囲を絞り込むなかで、5 月 29 日付けで積算結果を提示した。また、工事計画と発掘調査の円滑な調整を図るため実施計画を作成し、開発者の同意が得られたため、発掘調査の実施等について、平成 27 年 6 月 18 日付けで、埋蔵文化財発掘調査業務等協定を締結し、この協定書に基づき、大分市顕徳町 3 丁目における埋蔵文化財の発掘調査委託契約を開発事業者である、株式会社アライアンス代表取締役 中垣昌康氏と締結した。

発掘調査は、開発事業者からの資金協力を得て平成 27 年 9 月 30 日に完了することを条件に平成 27 年 7 月 14 日に着手し、第 1 面目の調査を 9 月 4 日までに終了した。その後、第 2 面目の調査を継続して行い、埋戻しを含めて 9 月 30 日までにすべての調査を完了した。調査面積は 522.4 m²である。なお、遺跡の記録資料や出土遺物等の整理作業は調査の終了後に引き続き行い、報告書の作成を平成 28 年 3 月 25 日まで行った。

第 2 節 調査組織

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 三浦 享二

調査体制（平成 27 年度）

文化財課		埋蔵文化財担当班	
文化財課長	塔鼻 光司	班長(ケル・ブリーダー)	池邊千太郎
参事	長野 清尊	主事	松浦 憲治(調査担当)
	坪根 伸也	嘱託職員	留野 優兵(調査・整理担当)
特別顧問	玉永 光洋	管理庶務担当班	
歴史資料館館長	武富 雅宣	班長(ケル・ブリーダー)	首藤 敏行
副館長	安東 俊昭	主査	竹中 智美
顧問	讃岐 和夫	主任	朝川 貴俊

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

大分市は九州の北東部に位置しており、北には瀬戸内海西端の別府湾、東には佐賀関半島から豊後水道、南には祖母・傾山系、西には九重連山が広がっている。別府湾に面する一帯には大分平野が広がり、九重連山や由布山系に源流を発する大分川が東流し、上野台地を境に北流して別府湾に注いでいる。大分川は大分平野西半部の形成にかかる主要河川であり、流域には沖積低地や台地・丘陵が形成され、上野台地よりも下流域では自然堤防・後背湿地・旧河道・浜堤などの微地形が複雑に広がっている。

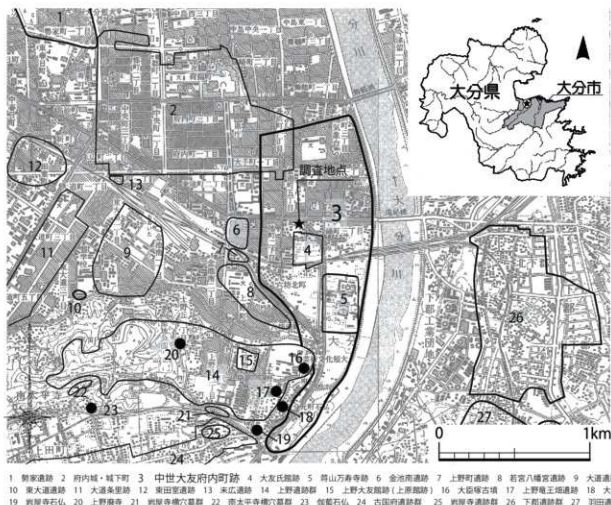
中世大友府内町跡第112次調査区は大分川河口部左岸に形成された標高4～5mの河岸段丘上に位置しており、南側にはこれら河口部の微高地を望む標高30～40mの上野台地が東西方向に延びている。

第2節 歴史的環境

中世大友府内町跡が位置する大分川左岸の沖積平野には後背湿地や微高地が、南には丘陵が広がり、北は海に面するという環境であり、多くの遺跡が存在し古くから人々が生活する場となっている。

ここでは、周辺地域を含め旧石器時代～中世に至る歴史的環境について述べることにする。

旧石器時代では明確な遺構は確認されていないが上野遺跡群が、縄文時代では大田遺跡群や羽屋・園遺跡、下部遺跡群や大分川河川敷遺跡があげられる。弥生時代では上野遺跡群や下部遺跡群が、古墳時代では大臣塚古墳



第1図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

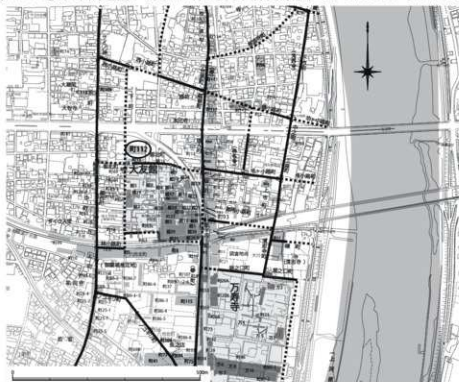
や南太平寺横穴墓群、大道遺跡群があげられる。

古代においては、豊後国や大分郡の中心施設は大分川の下流域に設置されたと考えられている。大分郡衙はその地名から大分川右岸の下郡遺跡群に比定され、豊後国府の所在地については古国府遺跡群と上野台地上が候補地として考えられてきた。古国府遺跡群は「古国府」の地名が残る有力地であり、羽屋・井戸遺跡（古国府遺跡群第10次）や羽屋・園遺跡では掘立柱建物群や倉庫群が確認されている。一方上野台地上に関しては文献資料で「高（隆）国府」の地名がみられ、上野台地東端部に位置する上野竜王畑遺跡からは9世紀代と思われる築地崩跡や掘立柱建物群、道路状遺構が確認されており国司館の可能性が指摘されている。台地東南端には平安時代末期頃と考えられる元町石仏・岩屋寺石仏が彫られており、上野台地上には官衙関連施設や宗教施設が点在しており現状では豊後国府の推定地として最も有力とされている。

鎌倉時代に入り、大友氏が豊後国に入ったのが建久4年（1193）とも同7年（1196）とも言われるが、初代能直や第2代親秀とともに守護として入国した事実はない。実際に豊後国に最初に入国したのは13世紀中頃の第3代頼泰とされるが、大友氏館跡の調査からはこの段階の遺構は確認されていない。中世大友府内町跡で遺構が確認され、大友氏による都市の建設が窺えるのは14世紀になってからである。その契機としては第5代貞親が徳治元（1306）年に万寿寺を建立したことが挙げられるが、14世紀代の遺構はこれまでの中世大友府内町跡の発掘調査結果全体からすると限定的である。当時の府内町としての遺構が広範囲にわたり展開するのは15世紀後半からである。順次町の整備が行われてきたが、第21代義鎮（宗麟）、第22代義統（吉統）の治世下である16世紀後半に最も発展する。

町は「大分市史」の「地籍図に残る戦国時代の府内・戦国時代の府内復原想定図」によると、南北2.1km、東西0.7kmの範囲に及び堺や博多に並ぶ規模であると考えられている。

当時の町の様子を表した資料に16世紀末頃の様子を描いた「府内古図」があり、大友館を中心として南北に4本・東西に5本の道路を格子状に配置し、道路に沿って40以上の町屋が形成されていたことが描かれている。また、町域には万寿寺をはじめとする仏教寺院やキリスト教会であるダイウス堂等の様々な宗教施設が点在していた様子がうかがえる。このように「府内古図」からも、府内の町は南蛮貿易等によりポルトガル人宣教師や商人、中国・東南アジア地域の国際色豊かな人々が行き交う国際貿易都市であったことがうかがえる。



第2図 調査地点位置図 (1/10,000)

しかし、繁栄を極めた大友氏も薩摩の島津氏との争いに敗れ、府内のまち域も天正14（1586）年島津軍の侵攻により焼失し、その後一定の範囲で復興するものの、文禄2年（1593）義統が朝鮮出兵時の失態により豊後国を除国されたことによって大友氏による豊後国支配は終焉を迎える。除国後の豊後は分割統治され府内地域の領主も次々に変わっていった。その中で慶長6（1601）年に入封した竹中重利が現在の府内城の修増築工事と城下の建設を行い、城下については城の周囲に碁盤目状に区画された町屋を形成し、中世大友府内町に所在した町や寺院を町名ともども移転させ、新たな街づくりを行っている。これにより、近世の府内城とその城下が完成し、現在の大分市中心部の原型ができあがった。

（過去の調査）

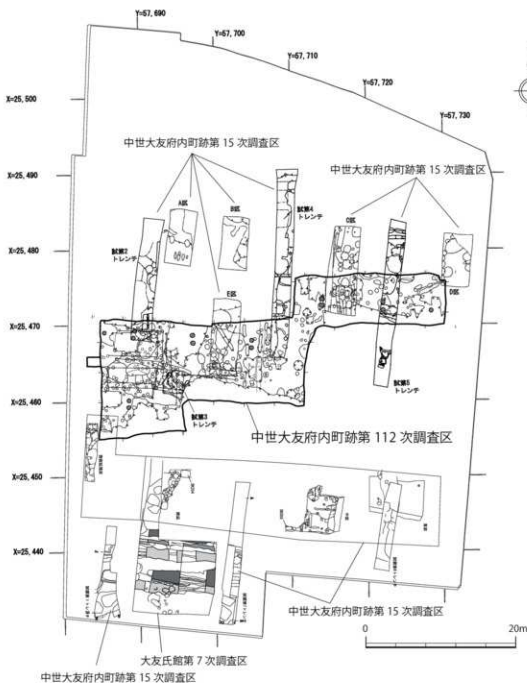
今回調査を行った中世大友府内町跡第112次調査区は大友氏館跡北側に隣接し、前述の「府内古図」によると「御北町」に推定される。周辺におけるこれまでの調査は、本調査区に一部重複する形で中世大友府内町跡第15次調査が、さらにその南側において大友氏館跡第7次調査が行われている。館7次調査では、大友氏館の北側推定外郭線上において、2条1組となる溝状遺構に挟まれた積土遺構が確認されており、大友氏館の北側外郭施設の一部と推定されている。町15次調査では大規模な擾乱や削平により、遺構の残存状態が悪く、館の北辺に沿う東西道路跡の検出には至らなかった。また、「御北町」の状況把握においては部分的であるが、当時の生活痕を示す柱穴や廃棄土坑群が確認されている。

第Ⅲ章 調査の成果

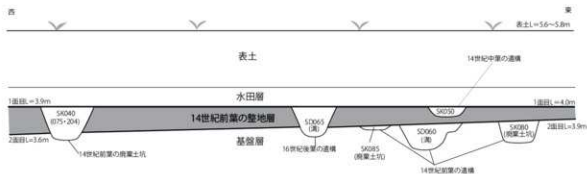
第1節 調査の概要

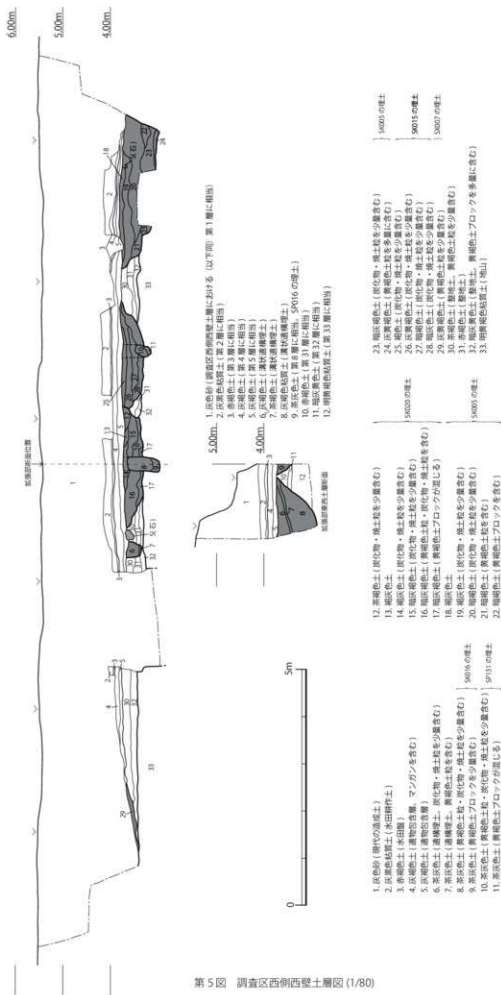
調査地点は大分市顕徳町3丁目に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地である中世大友府内町跡のほぼ中心部にあたる。「府内古図」によると推定「御北町」にあたる場所で、大友氏館跡の北側境界と接する部分でもある。

今回の調査は、民間の集合住宅建設に伴い、中世大友府内町跡第112次調査として平成27年7月14日から同年9月30日の期間に実施したものである。調査範囲は、事前の確認調査や中世大友府内町跡第15次調査の結果を踏まえて、遺跡に影響を及ぼす建物の基礎部分を中心に調査区を設定した。調査は、標高3.8～4.0mで検出される整地層（茶褐色土）を第1面目の遺構検出面に、それより下位の標高3.6～3.9mの整地層の最下位



第3図 周辺調査区配置図 (1/500)





第 5 図 調査区西部西壁土層図 (1/80)



- 8 -

Y=57690

Y=57700

Y=57710

X=25460

Y=57720

Y=57730

X=25470



- 1 灰褐色土 (敷地面)
 - 2 町区画境土 (アソコを多数に含む敷地面)
 - 3 町区画境土 (敷地面)
 - 4 町区画境土 (敷地面)
 - 5 町区画境土 (敷地面)
 - 6 町区画境土 (敷地面)
- 部分は建物基礎を示す



※敷地の外れへは、新しい方から
2→4→1→5→6、1→3と進む。

第7図 第1面全体透視図(1/200)

第3節 主要遺構

(1) 第1面

掘立柱建物跡

SB090(第8図)

調査区西側の q・r 22～24 グリッドで検出された桁行3間以上×梁行3間、身舎面積 24 m²以上の掘立柱建物跡で建物主軸方向 N-87°-W の東西棟である。重複関係は、SB090 の柱穴 b が SK045 を切っている。

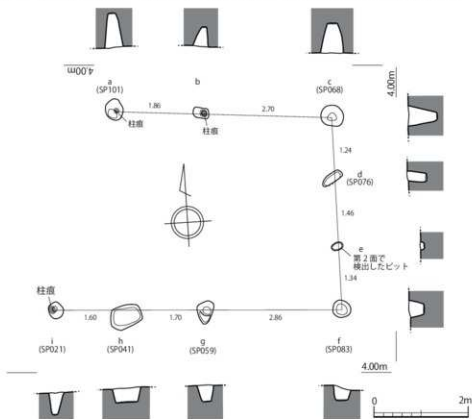
柱穴 e については、第2面目で検出した。柱穴の平面形状は楕円形や円形を呈する。柱穴の規模(第2面目で検出した柱穴 e を除く)は直径 0.19～0.67 m、検出面からの深度は 0.32～0.74 m を測る。SB090 を構成する柱穴 9 基のうち、柱穴 3 基から柱痕あるいは採取痕を検出した。柱間は桁行が 1.60～2.86 m、梁行が 1.24～1.46 m で、桁行の間隔については東側部分が他の部分より 1 m 程度広がっている。

柱穴 a(SP101)・f(SP083)・i(SP021) から土師器皿 C の破片が出土しており、建物の年代は 16 世紀中葉～後葉頃に位置づけられる。

SB095(第9図)

調査区西側の q・r 22～24 グリッドで検出された桁行3間以上×梁行2間、身舎面積 22 m²以上の掘立柱建物跡で建物主軸方向 N-88°-W の東西棟である。SB090 の建物ラインと重複する形で検出されており、周辺遺構との重複関係は柱穴 h が SK015 に切れ、柱穴 b が SK045 を切り、柱穴 d(SP121) が SK030 を切っている。

柱穴の平面形状は楕円形や隅丸方形を呈し、柱穴の規模は直径 0.26～0.77 m、検出面からの深度は 0.23～0.54 m を測る。SB095 を構成する柱穴 8 基のいずれからも、柱痕あるいは採取痕は確認できなかった。柱間は、桁行が 1.90～2.72 m、梁行が 1.68～1.76 m で、桁行の間隔についてはバラつきが認められる。



第8図 SB090 遺構実測図 (1/80)

柱穴 d(SP121)・e(SP064)・f(SP069)・g(SP028) から土師器片や土師質土器片が出土しているが、細片であるため明確な建物の年代は不明である。ただし、柱穴 d が 16 世紀中葉～後葉段階の SK030 を切っている状況から、16 世紀後葉以降に建築されたものと推定される。

SB100(第 10 図)

調査区西側の p・q22～24 グリッドで検出された桁行 3 間×梁行 2 間、身舎面積 16.67 m²の掘立柱建物跡で建物主軸方向 N-88°-W の東西棟である。SB090、SB095 の南側に位置し、周辺遺構との重複関係は SB100 の柱穴 b が SK010 に切れ、柱穴 a が SK015 に切れ、柱穴 f(SP071)・柱穴 g(SP184) が SK040 を切っている。

柱穴の平面形状は楕円形や不整楕円形を呈し、柱穴の規模は直径 0.18～0.95 m、検出面からの深度は 0.22～0.70 m を測る。SB100 を構成する柱穴 9 基のいずれからも、柱痕あるいは抜取痕は確認できなかった。柱間は、桁行が 1.64～2.38 m、梁行が 1.24～1.38 m で、桁行の間隔についてはバラつきが認められる。

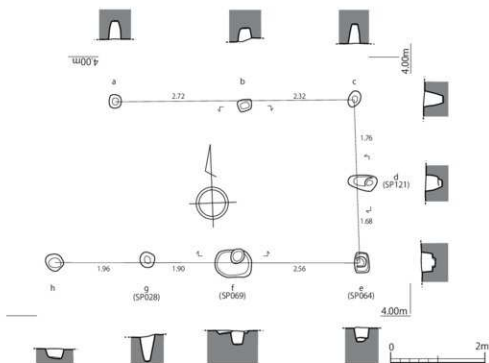
柱穴 g から瓦器碗、瓦質土器掻鉢(防長系)が出土し、柱穴 c(SP079)・柱穴 e(SP077) から土師器環 B 片が出土している。建物の年代は、土師器環 B から 15 世紀末葉～16 世紀前葉頃と考えられる。

SB105(第 10 図)

調査区西側の p22～23 グリッドで検出された桁行 3 間以上×梁行 1 間以上、身舎面積 11.33 m²以上の掘立柱建物跡で建物主軸方向 N-88°-W の東西棟である。SB100 の南側に位置し、周辺遺構との重複関係は、SB105 の柱穴 b(SP097) が SK025 を切り、柱穴 c(SP117) は SK035 に切れ、柱穴 d と柱穴 e(SP102) が SK040 を切っている。

柱穴の平面形状は楕円形や不整楕円形を呈し、柱穴の規模は直径 0.28～0.54 m、検出面からの深度は 0.24～0.52 m を測る。SB105 を構成する柱穴のうち、柱穴 e で柱痕が確認された。柱間は桁行が 1.92～1.98 m、梁行が 1.94 m でそれぞれの間隔は整っている。

柱穴 a から土師器環 B 片、大内 A 式皿が出土し、柱穴 e から土師器環 B 片が出土している。建物の年代は、土師器環 B から 15 世紀末葉～16 世紀前葉頃と考えられる。



第 9 図 SB095 遺構実測図 (1/80)

SB110(第11図)

調査区中央の p24・25 ~ p1 グリッドで検出された桁行4間以上×梁行2間以上、身舎面積 29.66 m²以上の掘立柱建物跡で建物主軸方向 N-90° -W の東西棟である。柱穴 a(SP218) のみ第2面で検出した。SB115 とともに SD065 の西側に位置しており、周辺遺構との重複関係は柱穴 e が SK168 を切っている。

柱穴の平面形状は楕円形や不整楕円形を呈し、柱穴の規模は直径 0.26 ~ 0.52 m、検出面からの深度は第2面で検出した柱穴の (SP218) を除いて 0.18 ~ 0.47 m を測る。SB110 を構成する柱穴 7 基いずれからも、柱痕あるいは採取痕は確認できなかった。柱間は桁行が 1.88 ~ 1.98 m、梁行が 1.92 ~ 1.96 m でそれぞれの間隔は概ね整っている。

柱穴 a(SP218) から吉備系土師器碗、柱穴 b(SPO78) から土師器皿 C、大内 A 式土師器、柱穴 f(SP167) から土師器皿が出土している。建物の年代は、土師器皿から 16 世紀中葉~後葉頃と考えられる。

SB115(第11図)

調査区中央の p24・25 ~ p1 グリッドで検出された桁行4間以上×梁行2間以上、身舎面積 24.7 m²以上の掘立柱建物跡で建物主軸方向 N-83° -W の東西棟である。SB110 とともに SD065 の西側に位置しており、周辺遺構との重複関係は柱穴 e が SK055 に切られている。

柱穴の平面形状は楕円形や不整楕円形を呈し、柱穴の規模は直径 0.24 ~ 0.50 m、検出面からの深度は SK055 に削られている柱穴 e を除いて 0.24 ~ 0.42 m を測る。SB115 を構成する柱穴 7 基いずれからも、柱痕あるいは採取痕は確認できなかった。柱間は桁行が 1.38 ~ 2.02 m、梁行が 1.64 ~ 1.95 m でバラつきが認められる。

柱穴 c(SP081) から土師器皿 C、柱穴 d(SP156)・柱穴 g(SP146) から土師器環 B が出土している。建物の年代は、土師器皿 C が出土しており、16 世紀後葉の遺構である SK055 に切られていることから、16 世紀後葉までに埋没したと思われる。

井戸跡

SE070(第12図)

調査区中央の p2・3 グリッドで検出された井戸跡である。遺構の南半分は、カクラン (S001) によって大きく削平を受け、SD065 にも切られている。

平面形状は円形を呈するものと想定され、直径は 3.7 m 前後を測る。遺構の一部が調査区外に展開することと、検出面から約 1 m 程度掘削した地点で湧水が認められたことから、安全面を考慮し、その地点で掘削を停止した。

遺構検出した段階で直径 0.6 m 程度の井戸枠プランを検出した。井戸枠は円形で石組みや木枠は確認されなかった。井戸枠内の灰黄褐色土からは、土師器環 B や土師質土器火鉢 A2 が出土したが、曲物などの木製品は出土していない。

また、裏込め土である暗灰褐色土からは、土師器環 B、龍泉窯系青磁碗 (大宰府碗Ⅲ類)・碗 (上田 C 類)・碗×皿・瓶×壺、平瓦などが出土している。

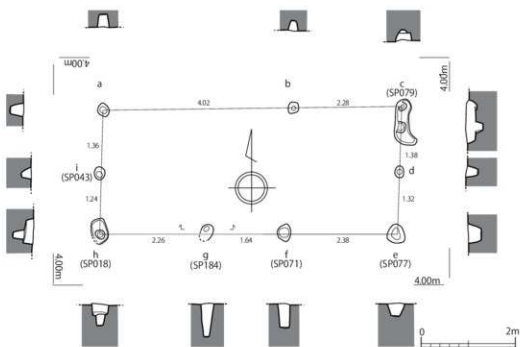
遺構の時期は出土遺物から 15 世紀末葉 ~ 16 世紀初頭頃であると考えられる。SD065 と同様に、整地層の造成土と SE070 の埋土の土色や土質が類似していたため第1面で検出することができなかったが、SE070 と整地層の時期の検討から本来は SE070 も第1面の遺構であると考えられる。

土坑

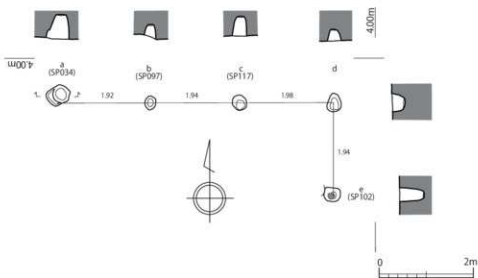
SK005(第13図)

調査区西側の r22 グリッドで検出された土坑で、遺構の西側半分は、調査区外に展開している。遺構の重複関係はカクラン (S003・004) に切れ、SK015 を切っている。

SB100

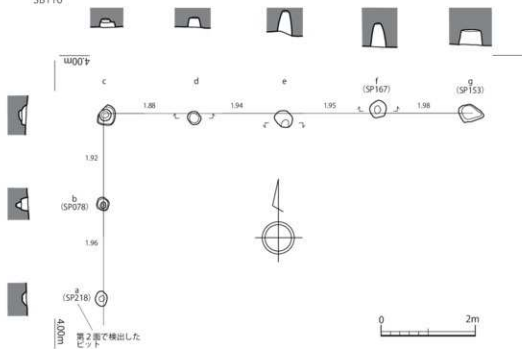


SB105

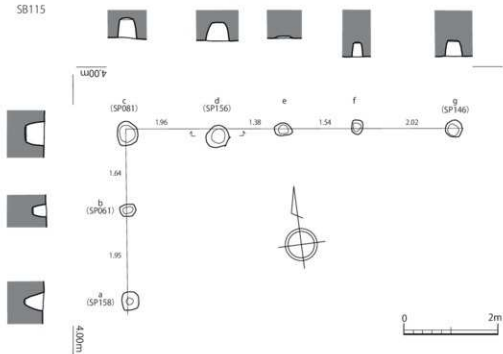


第 10 図 SB100・SB105 遺構実測図 (1/80)

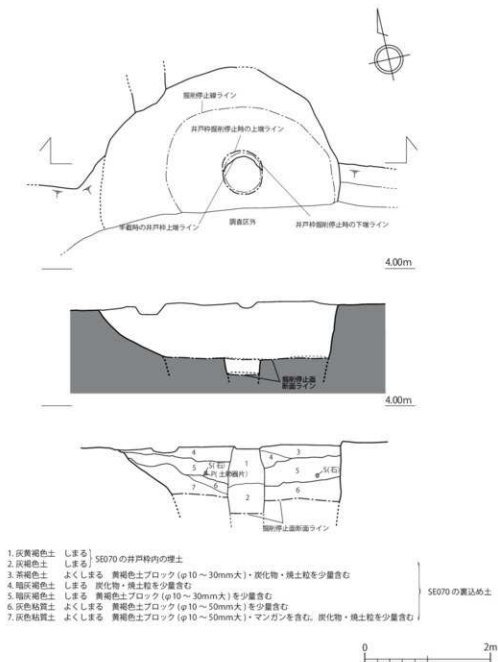
SB110



SB115



第11図 SB110・SB115 遺構実測図 (1/80)

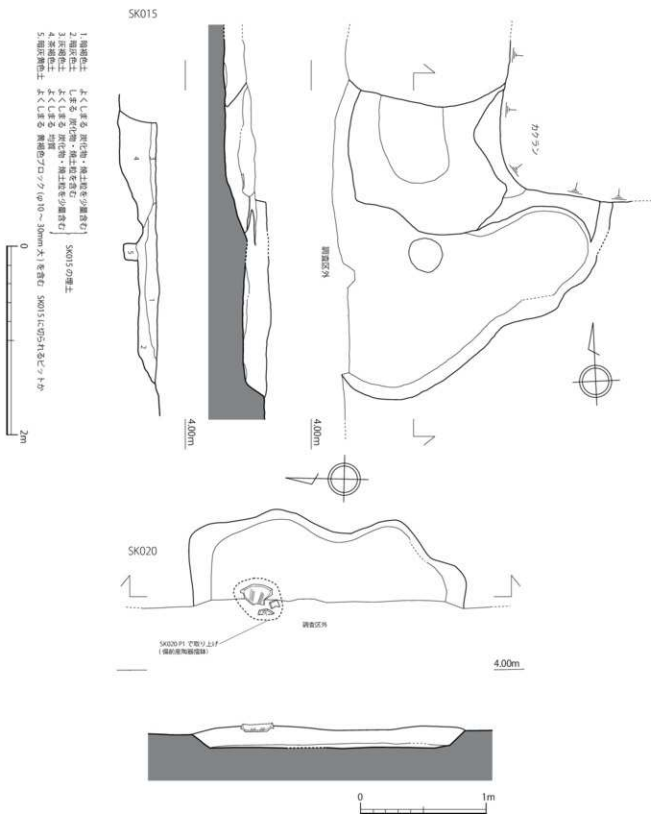


第12図 SE070 遺構実測図 (1/60)

平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 3.28m、短軸 2.1+α m、検出面からの最大深度は 0.60 mを測る。断面形状は逆台形状になっている。土層の観察により、埋土中に黄褐色土ブロック・炭化物・焼土粒を含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。

遺構内から土師器環 B・皿 C・大内 A 式皿・白磁皿 (大宰府皿Ⅸ類)・丸瓦などが出土している。その他に瓦質土器火鉢、備前産陶器播鉢、龍泉窯系青磁片、土甕などが出土し、出土遺物の内容も多種多様である。このような状況から廃棄土坑として使用されたものと想定される。遺構の時期は、出土遺物から 16 世紀中葉頃と考えられる。





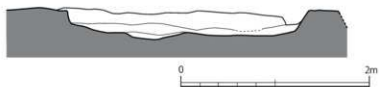
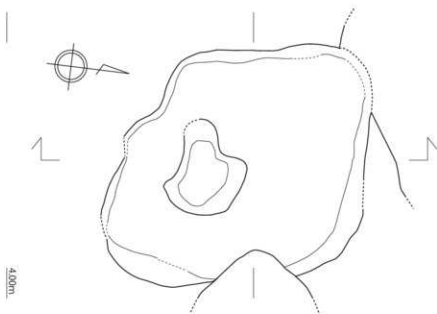
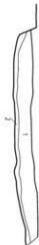
第 14 図 SK015・SK020 遺構実測図 (1/40・1/30)

SK010(第 13 図)

調査区西側の p・q23 グリッドで検出された土坑である。調査区西側では 10 基前後の土坑群が確認されている。土坑同士の重複関係は、SK010 が SK025・035・040(075・204) を切っており、土坑群の中では最も新しい。

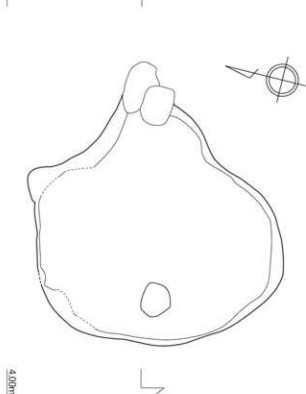
SK025

1. 暗褐色土
 2. 暗褐色土
- 大きく異なる 灰化層・暗褐色土を少量含む
大きく異なる 暗褐色土を(約)3～10mm大)を少量含む

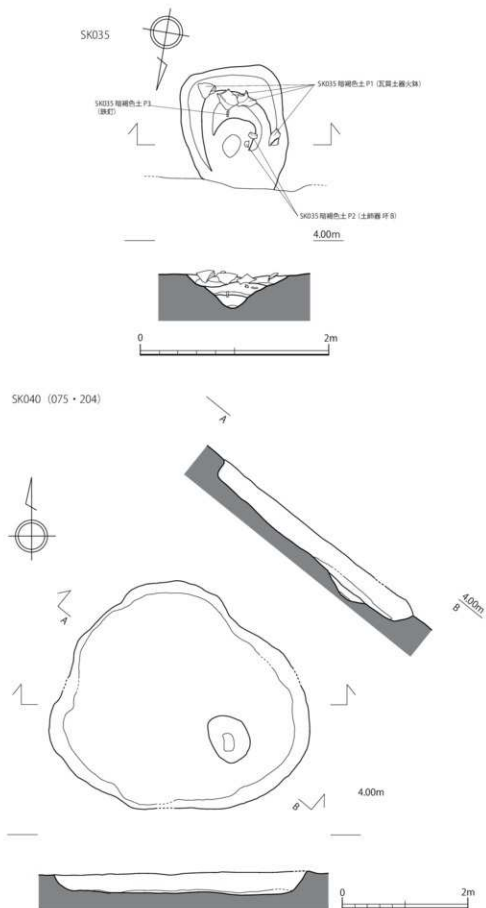


SK030

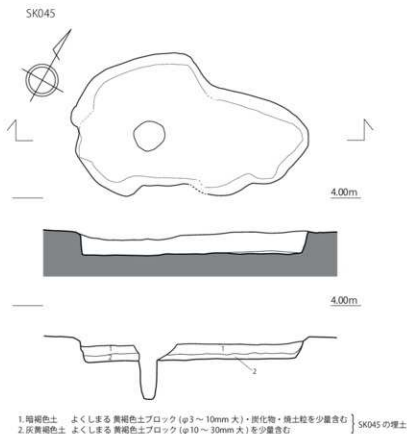
1. 暗褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 暗褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 暗褐色土
 6. 暗褐色土
- しりとりなし SP121の柱状
大きく異なる 暗褐色土を少量含む
大きく異なる 暗褐色土を(約)3～10mm大)を少量含む
大きく異なる 暗褐色土を(約)3～10mm大)を少量含む
大きく異なる 暗褐色土を(約)3～10mm大)を少量含む
大きく異なる 暗褐色土を(約)3～10mm大)を少量含む



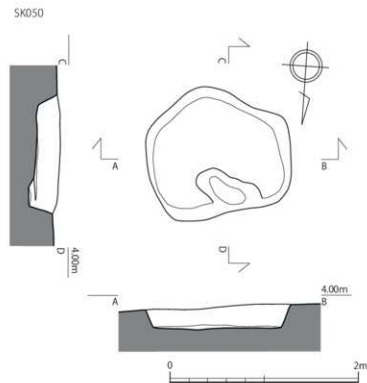
第15図 SK025・SK030 遺構実測図(1/40)



第 16 図 SK035・SK040(075・204) 遺構実測図 (1/40・1/60)



1. 暗褐色土 よくしまる 黄褐色土ブロック (φ3~10mm 大)・炭化物・焼土粒を少量含む } SK045の埋土
2. 灰黄褐色土 よくしまる 黄褐色土ブロック (φ10~30mm 大)を少量含む



第17図 SK045・SK050 遺構実測図 (1/40)

平面形状は楕円形を呈し、長軸3.28m、短軸1.68m、検出面からの最大深度は0.33mを測る。断面形状は浅い船底状になっている。

遺構内から土師器杯B・皿C・小皿B、備前産陶器片、龍泉窯系青磁碗(上田B類)、平瓦、土鍾・土壁、石製へら、鉄釘・不明鉄製品などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉〜末葉頃と考えられる。

SK015(第14図)

調査区西側のq22グリッドで検出された土坑で、遺構の西半分は調査区外に展開している。重複関係は、カクランS004やSK005・025に切れ、SB095の柱穴hを切っている。

平面形状は不整楕円形を呈し、長軸3.1+αm、短軸2.9+αm、検出面からの最大深度は0.40mを測る。東西方向の断面形状は二段掘りになっており、南側に中段テラスを有し、北側は南側の中段テラスの床面から0.2m程度深くなっている。土層の観察により、第1・2層と第3・4層の堆積状況から2基の土坑が重複していた可能性も考えられる。

出土遺物は、暗灰褐色土(第1・2層)と暗茶色土(第3・4層)からともに土師器杯Bが出土しており、明確な時期差は認められない。

遺構内から土師質土器鍋B、龍泉窯系青磁碗(上田E類)、白磁皿(森田E-2群)、平瓦・埴、土鍾、鉄釘・鉄滓などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀前葉頃と考えられる。

SK020(第14図)

調査区西側のp・q22グリッドで検出された土坑で、遺構の西半分は調査区外に展開している。遺構の重複関係は、平

面上ではSP016に切られており、調査区西側西壁面土層の観察からSK020が北側に隣接するSK015を切っている。

平面形状は、西側半分が調査区外に展開するため不明であるが、検出面での遺構の規模は、長軸2.16m、短軸0.7+ α m、検出面からの最大深度は0.18mを測る。断面形状は、浅い船底状になっている。

遺構内から土師器環B、瓦質土器片、備前産陶器埴鉢、龍泉窯系青磁碗(上田C類)、土壁、鉄釘などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀前葉頃と考えられる。

SK025(第15図)

調査区西側のp・q22～23グリッドで検出された土坑である。土坑群の中での重複関係は、SK010に切られ、SK015・040(075・204)を切っている。

平面形状は不整形円形を呈し、長軸3.2+ α m、短軸2.62m、検出面からの最大深度は0.27mを測る。断面形状は浅い船底状になっており、中央床面に平面形状が不整形で、深度が0.1m未満の浅い窪みを有している。土層の観察により、埋土中に炭化物・焼土粒が混入する層が認められる。遺構内から土師器環B・皿C・大内A式皿、瓦質土器火鉢、土師質土器鍋、龍泉窯系青磁碗(上田D類)、景徳鎮窯系青花皿(小野B1群)、平瓦、土鍾、火打石、鉄釘などが出土している。周辺で確認された土坑群と同様に、多種多様な遺物が出土することから廃棄土坑として使用されたものと考えられる。遺構の時期は、出土遺物から16世紀前葉～中葉頃と考えられる。

SK030(第15図)

調査区西側のq・r23グリッドで検出された土坑である。他の土坑との重複関係は認められないが、SB095の柱穴d(SP121)や床面に根石を有する柱穴(SPO42)などに切られている。

平面形状は不整形円形を呈し、長軸2.48m、短軸2.30m、検出面からの最大深度は0.24mを測る。断面形状は浅い船底状になっている。土層の観察により、埋土中に黄褐色ブロック・炭化物・焼土粒が混入する層が認められる。遺構内から土師器環B・皿C・小皿B、瓦質土器片、土師質土器片、同安窯系青磁碗、平瓦、土鍾、鉄釘などが出土している。

埋土の状況や出土遺物の内容が周辺の土坑群の特徴と類似していることから、同様に廃棄土坑として使用されたものと考えられる。遺構の時期は、出土遺物から16世紀中葉～後葉頃と推定される。

SK035(第16図)

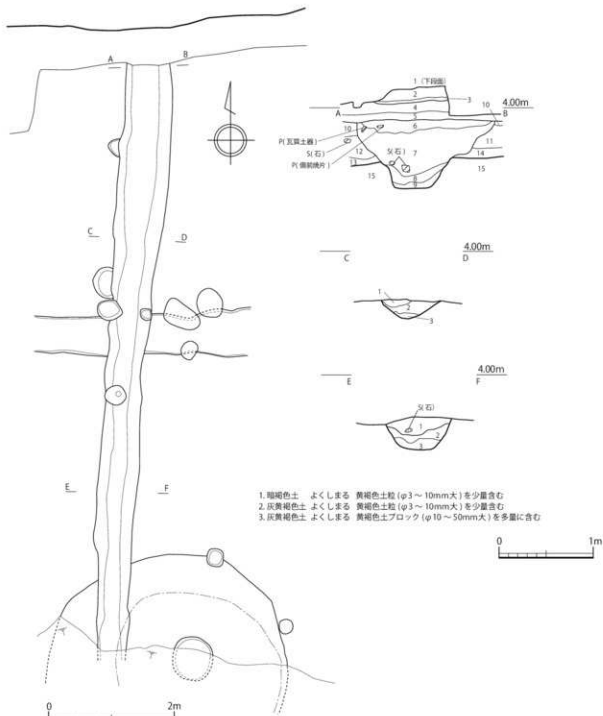
調査区西側のp23グリッドで検出された土坑である。土坑同士の重複関係では、SK010に切られ、SK040(075・204)を切っている。

平面形状は隅丸方形を呈し、長軸1.3+ α m、短軸1.07m、検出面からの最大深度は0.35mを測り、調査区西側で確認された土坑群の中では最小規模の土坑である。遺構検出段階で、瓦質土器深鉢の底部片4点がひっくり返った状態で散乱して出土した。その他に土師器環B・皿C・小皿A、火打石、鉄釘・鉄製刀子などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀前葉頃と考えられる。

SK040(075・204)(第16図)

調査区西側のp・q23グリッドで検出された土坑である。土坑同士の重複関係は、SK010・025・035に切られている。第1面ではSK040と整地層の土質・土色が非常に類似しており、遺構プランの検出が困難であったため、第2面で再検出し遺構掘削を行った。第1面で検出したSK040に対し、第2面で検出したSK040下層部分については、SK075のS番号を付けている。

- | | | | |
|-------------|-------|----------------------------|--|
| 1. 灰色砂 | しまりなし | コンクリートブロック・クラッシャーランを含む | 現代の造成土 |
| 2. 灰黒色粘質土 | よくしまる | マンガンを少量含む | 水田耕作土 |
| 3. 赤褐色土 | よくしまる | マンガンを多量に含む | 水田盤 |
| 4. 灰褐色土 | よくしまる | マンガンを含む | 遺物包含層
4層は2・3層の水田の影響で
マンガンを含むものと考えられる |
| 5. 灰褐色土 | よくしまる | 土師磁片を含む | |
| 6. 暗灰褐色土 | よくしまる | 黄褐色土粒 (φ3~10mm大) を少量含む | SD065の埋土 |
| 7. 暗褐色土 | よくしまる | 黄褐色土粒 (φ3~10mm大) を少量含む | |
| 8. 灰黄褐色土 | よくしまる | 黄褐色土粒 (φ3~10mm大) を少量含む | 埋地層 |
| 9. 灰黄褐色土 | よくしまる | 黄褐色土ブロック (φ10~50mm) を多量に含む | |
| 10. 暗赤褐色土 | よくしまる | 炭化物・腐土粒・マンガンを少量含む | |
| 11. 茶褐色土 | よくしまる | 炭化物・腐土粒を少量含む | |
| 12. 暗灰黄色土 | よくしまる | 炭化物・腐土粒を少量含む | |
| 13. 暗灰黄色土 | よくしまる | 黄褐色土ブロック (φ10~50mm) を多量に含む | |
| 14. 暗灰黄色土 | よくしまる | 黄褐色土粒 (φ3~10mm大) を少量含む | |
| 15. 明黄褐色粘質土 | よくしまる | 地山 | |



第18図 SD065 遺構横断面図・土層断面図 (1/60・1/40)

SK040(075)とSK204の関係については、SK204の第1層とSK040(075)の第2層を比較すると、土色や炭化物・焼土粒を含む点で類似していることや両遺構の時期差が認められないことなどから同一遺構であると考えられる。平面形状は楕円形を呈し、長軸 3.98m、短軸 3.60m、第2面の検出面からの最大深度は 0.53m を測る。第1面の調査区西側で確認された土坑群の中では最大規模の土坑である。また、床面の東側に平面形状が楕円形を呈する長軸 0.78m、短軸 0.64m、深さ 0.12m 程度の浅いピットを確認した。

遺構内から土師器環 A・小皿 A、備前産陶器鉢、中国南部産陶器片、石臼、鉄釘などが出土しており、遺構の時期は出土遺物から 14 世紀前葉頃と考えられる。

SK045(第 17 図)

調査区西側の r23 グリッドで検出された土坑で、SK030 の北側に隣接している。他の土坑との重複関係は認められないが、SB090 の柱穴 b と SB095 の柱穴 b に切られている。

平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 2.43m、短軸 1.40m、検出面からの最大深度は 0.22m を測る。断面形状は浅い船底状になっている。土層の観察により、埋土中に黄褐色土ブロック・炭化物・焼土粒が混入する層が認められる。遺構内から土師器環 B・小皿 B、龍泉窯系青磁碗、平瓦、土鏝、鉄釘、不明鉛製品などが出土している。埋土の状況や出土遺物の内容などから廃棄土坑として使用されたものと考えられる。遺構の時期は、出土遺物から 16 世紀前葉頃と推定される。

SK050(第 17 図)

調査区東側の s5 グリッドで検出された土坑である。重複関係では、SX141(溜まり状遺構)を切っている。

平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 1.52m、短軸 1.40m、検出面からの最大深度は 0.28m を測る。断面形状は浅い船底状になっている。遺構内から土師器環 A・小皿 A・吉備系碗、瓦器碗、龍泉窯系青磁碗(上田 B 類)、白磁皿(森田 A 群)・皿片などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から 14 世紀中葉～後葉頃と推定される。

溝状遺構

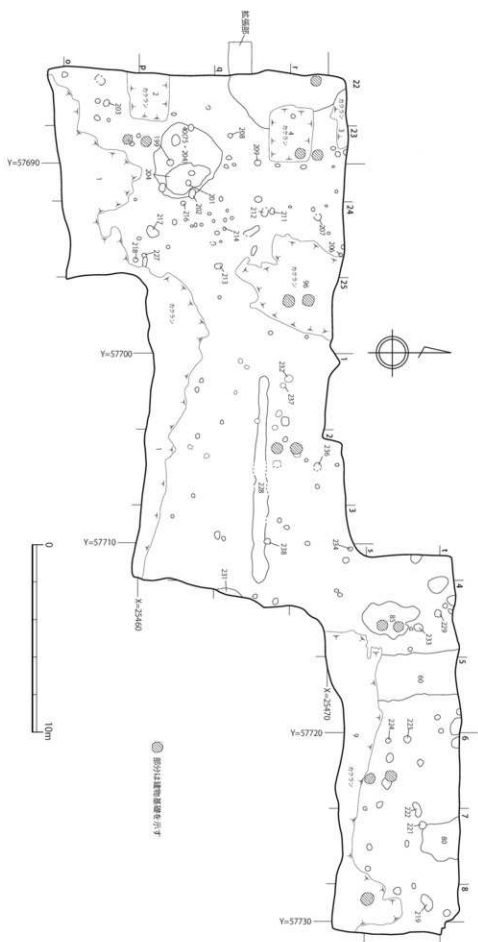
SD065(第 18 図)

調査区中央の p～r2 グリッドで検出された南北方向に走る溝状遺構である。本来は第1面の遺構であるが、整地層の造成土と遺構埋土の土色・土質が類似していたことから遺構プランを確認できず第2面で検出した。

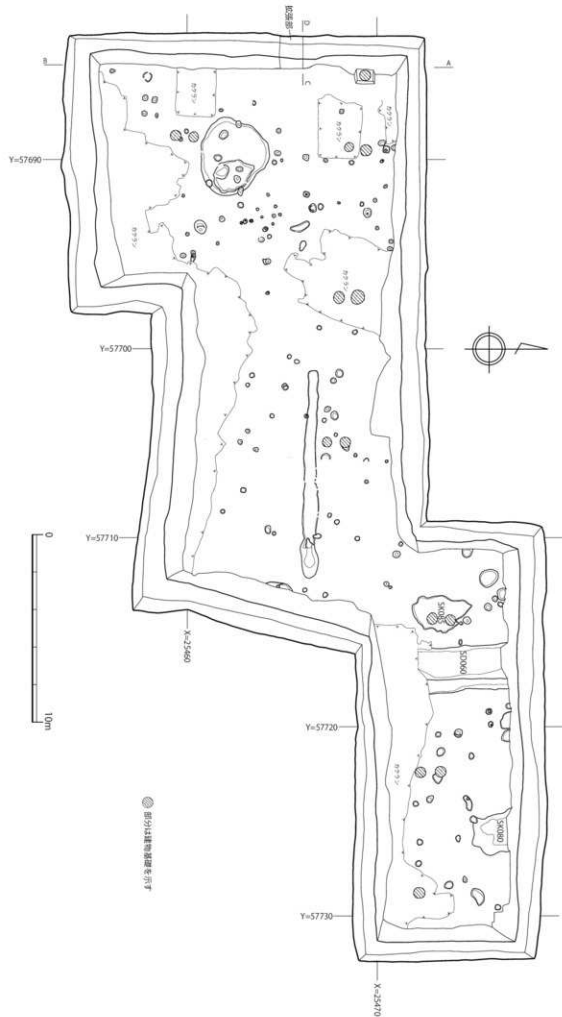
遺構北端は調査区外に延び、南端はカクラン(S001)によって大きく削平を受けている。重複関係は、SD065 が SE070・SD228 を切っている。溝の規模は、長さ $9.6+a$ m、最大幅 0.8m、検出面からの最大深度は 0.38m であり、東西軸の断面形状は楕円状になっている。溝は直線状に走っており、主軸方向は N-4°-E を指向している。

東西ベルトの土層の観察から、埋土中に砂の混入が認められず、流水の痕跡は確認できなかった。また調査区中央の北壁面土層の観察から、本来は第1面の遺構であることが判明し、溝の規模は上端幅 1.44m、深度は 0.72m を測る。

遺構内からは、土師器皿 C、土師質土器火鉢、瓦質土器火鉢・鍋、龍泉窯系青磁碗(上田 B 類)、景德鎮窯系青花碗(小野 E 群)、漳州窯系青花皿、備前産陶器搥鉢・鉢、軒丸瓦、丸瓦・平瓦、鉄釘・不明鉄製品などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から 16 世紀後葉頃と考えられる。

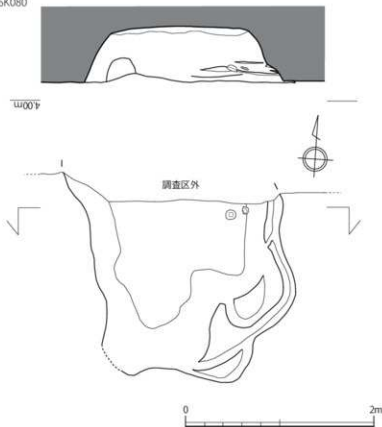


第19図 第2面遺構配置図 (1/200)

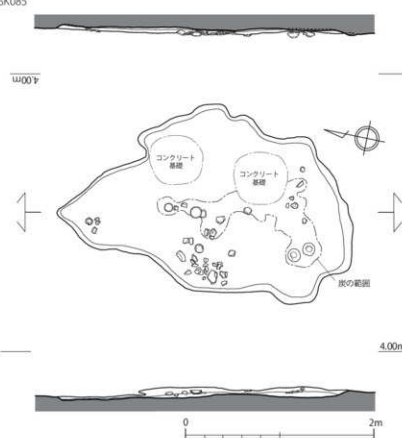


第 20 図 第 2 面全体遺構図 (1/200)

SK080



SK085



第 21 図 SK080・SK085 遺構実測図 (1/40)

(2) 第 2 面

土坑

SK080(第 21 図)

調査区東側の s・t7 グリッドで検出された土坑で、遺構の北半分は調査区外に展開している。遺構の重複関係は、SK080 が SP221 に切られている。

平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 $2.0 + \alpha$ m、短軸 2.08 m、検出面からの最大深度は 0.59 m を測る。断面形状は逆台形状になっており、南側に数段のテラスを有している。

土層の観察により、埋土中に炭化物・焼土粒の混入が認められることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺構内から土師器環 A・小皿 A・吉備系椀、土師質土器鍋 B、龍泉窯系青磁碗（上田 B 類）、白磁皿（森田 A 群）などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から 14 世紀前葉頃と考えられる。

SK085(第 21 図)

調査区東側の s4 グリッドで検出された土坑で、南北方向に走る SD060 の西隣に位置する。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 3.09 m、短軸 1.96 m、検出面からの最大深度は 0.12 m を測る。

平面規模に対し深度が非常に浅く、断面形状は浅い船底状になっている。遺構検出段階で炭が広範囲にわたって広がっているのを確認した。遺構内からは、多量の土師器環 A・小皿 A の完形品や破片が散乱した状態で出土した。

その他に、少量であるが土師器吉備系椀、土師質土器鍋・鍋×羽釜、須恵質土器片口鉢（東播系）、鉄釘などの破片が出土している。

埋土中に一定量の炭化物の混入が認められる点や遺物の出土状況から、一括廃棄が行われたものと考えられる。

遺構の時期は、出土遺物から 14 世紀前葉頃と考えられる。

溝状遺構

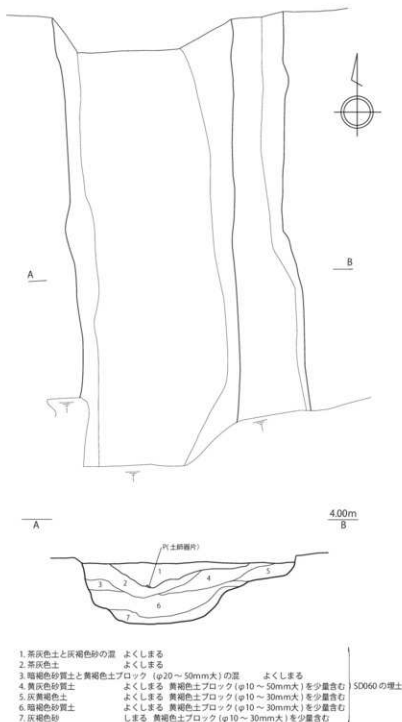
SD060(第 22 図)

調査区東側の s・t グリッドで検出された南北方向に走る溝状遺構である。北端・南端ともに調査区外に延びている。溝の規模は、長さ $4.8 + \alpha$ m、最大幅 2.36m、検出面からの最大深度は 0.81m である。

東西軸の断面形状は、東側に一段テラスを有している。溝は直線状に走っており、主軸方向は、 $N-3^{\circ}-W$ を指向している。

土層観察により、最下層が砂層であることから、流水があったことが推定される。遺構内からは土師器環 A・小皿 A、土師質土器鍋 B1、瓦器椀、龍泉窯系青磁碗（上田 B 類）・碗・水注×瓶、銅銭、鉄釘などが出土しており、特に第 1～5 層に対応する茶灰色土から遺物が多く出土している。

また、埋土中に黄褐色土ブロックが一定量混入している状況が認められることから、人為的に埋め戻されたものと推定され、これらの遺物はその際に廃棄されたものと考えられる。遺構の時期は出土遺物から 14 世紀前葉頃と考えられる。



第 22 図 SD060 遺構実測図 (1/40)

第4節 出土遺物

今回の調査では、コンテナ24箱の遺物が出土した。出土遺物は弥生時代から現代に至るまで幅広い時代にわたっているが、主体となるのは14世紀前葉から16世紀後葉にかけての遺物で、土師器環や小皿の出土量が圧倒的に多く、輸入陶磁器が少ないという特徴がみられる。今回掲載出来ていない遺物は多くあるが、主要遺構の時期を示すものや特殊な遺物を中心に掲載、報告を行う。

また、本文中に記載がなかった遺構及び出土遺物については遺構出土遺物一覧表(表1～7)を、遺物の種類・名称・分量については遺物観察表(表8～11)に示しており、ここでは特に重要と思われる遺物について記述する。

SB090 出土遺物 (第23図)

第23図1は土師質土器の鍋の口縁部であり、器高は $4.9 + a$ cmを測る。2は土師器皿Cの口縁部である。器高は $1.5 + a$ cmで胎土に1mm大の角閃石を微量に含む。3は土師器皿Cである。器高は $1.9 + a$ cmを測り、内外面に強いヨコナデがある。4は土師器皿Cである。器高は2.0cmを測り、反転復元したところ、口径12.4cm、底径6.4cmで胎土に石英、雲母、赤色粒子を含む。5は土師器皿Cである。器高は $2.1cm + a$ cmを測り、胎土に石英や角閃石を含む。

SB100 出土遺物 (第23図)

6は土師器環Aである。器高は4.0cmを測り、反転復元したところ、口径16.1cm、底径10.6cmで外面底部に糸切り離しの痕跡が見られる。7は防長系の瓦質土器播鉢の口縁部である。器高は $5.3 + a$ cmを測り内面には播目が残る。

SB105 出土遺物 (第23図)

8は土師器環Bの口縁部である。器高は $1.7 + a$ cmを測り、色調は橙色である。

SB110 出土遺物 (第23図)

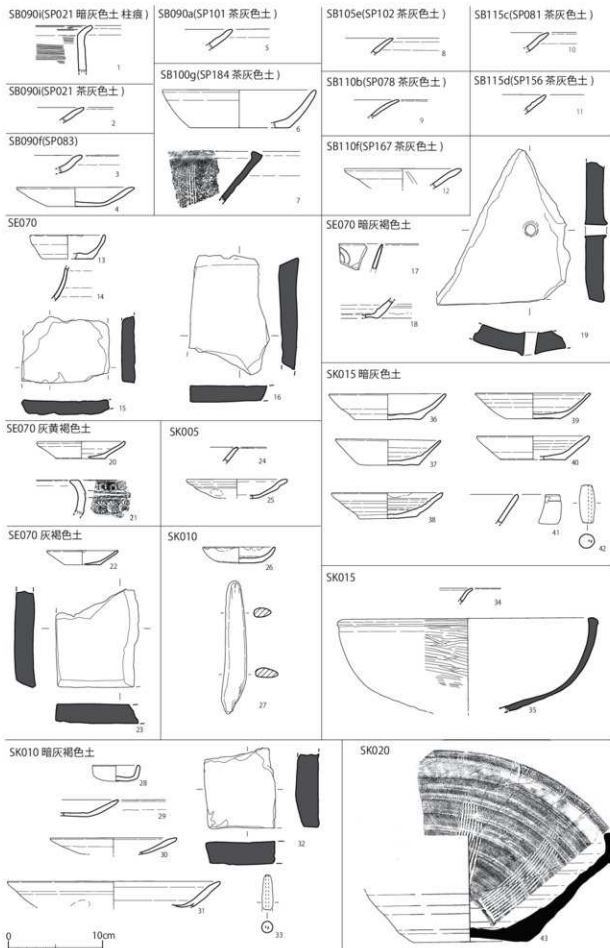
9は土師器皿Cである。器高は $1.7 + a$ cmを測り、色調はにぶい黄橙色を呈する。10は土師器皿Cである。器高は $2.0 + a$ cm、口径12.2cmを測り、色調は茶白色を呈する。

SB115 出土遺物 (第23図)

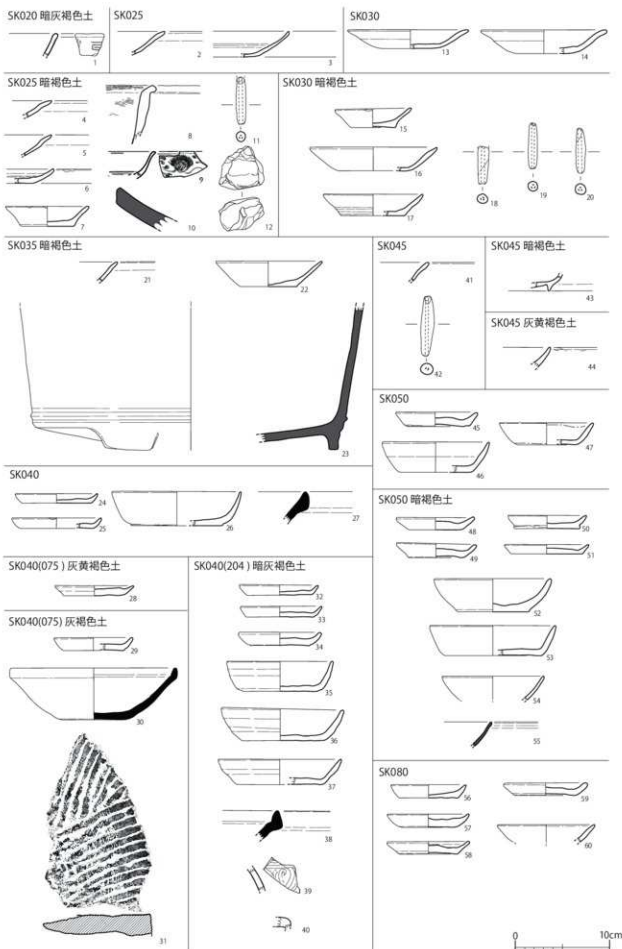
11は土師器皿Cである。器高は $2.0 + a$ cmを測り、色調は暗灰～淡灰茶色を呈する。12は土師器環Bである。器高は $1.9 + a$ cmを測り、色調は淡橙色を呈する。

SE070 出土遺物 (第23図)

13は土師器環Bである。器高は2.5cmを測り反転復元したところ、口径8.0cm、底径5.4cmで口縁部に煤が付着していたことから灯明皿として使用された可能性がある。14は龍泉窯系青磁碗(上田B類)である。器高は $3.5 + a$ cmを測り内外面に貫入が認められる。15、16は平瓦であり、16は縄目のタタキ後ナデ調整した痕跡が残る。17は龍泉窯系青磁碗(上田C類)の口縁部である。器高は $2.8 + a$ cmを測る。18は龍泉窯系青磁の瓶又は壺の底部から体部にかけての部分である。器高は $1.8 + a$ cmで内面は施軸され外面は施軸と露胎部分が見られる。19は平瓦で最大長 $16.1 + a$ cm、最大幅 $11.6 + a$ cm、最大厚1.9cmを測る。表面から裏面にかけて直径1.0cmの釘穴が開けられている。20は土師器環Bである。器高は1.8cmを測り、反転復元したところ口径9.2cm、底径5.2cmである。底部に糸切り離しの痕跡が認められる。21は土師質土器火鉢(A2類)である。器高は $3.7 + a$ cmを測り口縁部外面に菊型のスタンプ文を有している。22は土師器環Bである。器高は1.5cm、底径は3.8cm

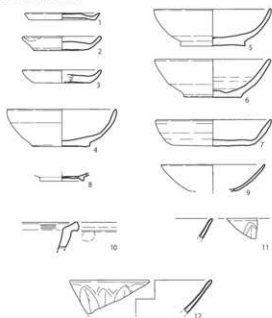


第 23 図 SB090・100・105・110・115 SE070 SK005・010・015・020 出土遺物実測図 (1/4)

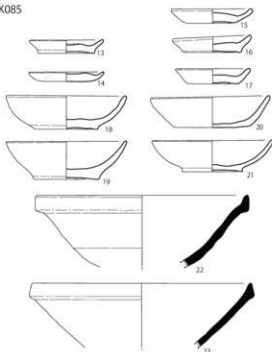


第 24 図 SK020・025・030・035・040・040(075)・040(204)・045・050・080 出土遺物実測図 (1/4)

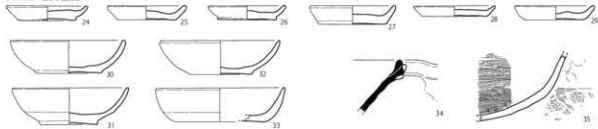
SK080 暗灰褐色土



SK085



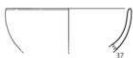
SK085 暗灰色土



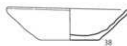
SK108



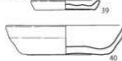
SK108 灰黄褐色土



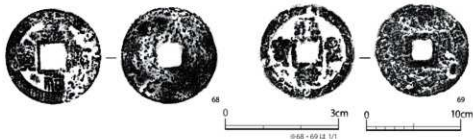
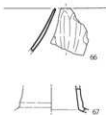
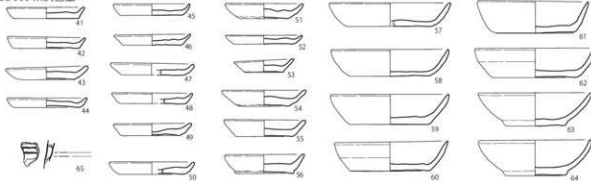
SK134 灰黄褐色土



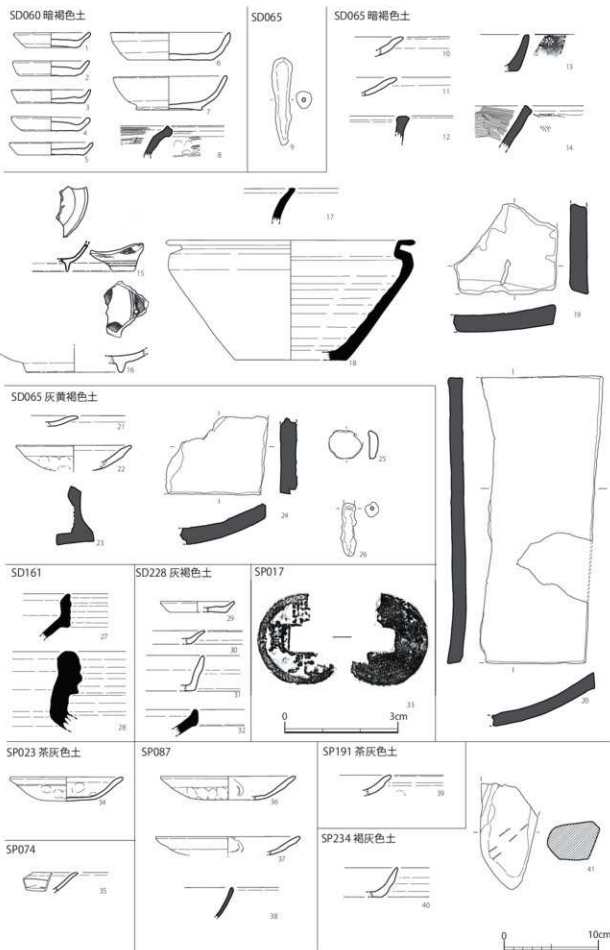
SD060



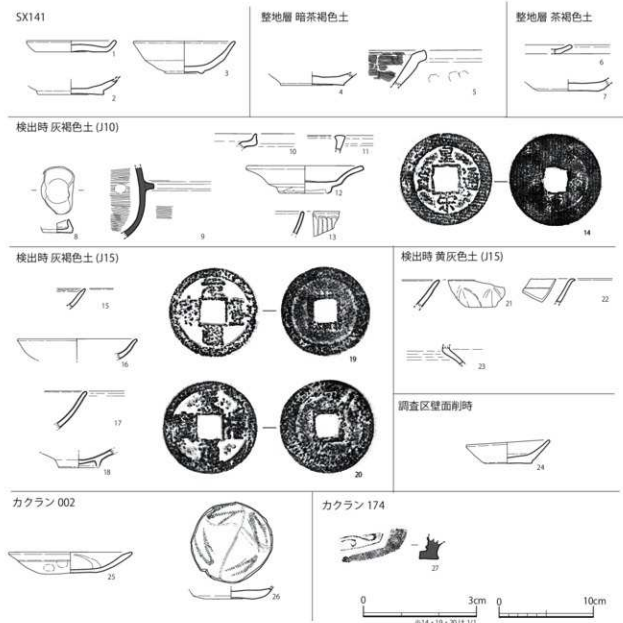
SD060 茶灰色土



第 25 図 SK080・085・108・134 SD060 出土遺物実測図 (1/1・1/4)



第 26 図 SD060・065・161・228 SP017・023・074・087・191・234 出土遺物実測図 (1/1・1/4)



第 27 図 SX141 その他出土遺物実測図 (1/1・1/4)

を測り、反転復元したところ口径は 7.4cm である。底部に糸切り離しの痕跡が見られ口縁部には煤が付着している。23 は平瓦である。最大長は $10.3 + \alpha$ cm、最大幅 $8.7 + \alpha$ cm、最大厚 2.1cm を測る。

SK005 出土遺物 (第 23 図)

24 は白磁皿 (大宰府 IX 類) の口縁部である。器高は $1.6 + \alpha$ cm を測り、内外面とも口縁部が露胎しているいわゆる「口禿」の白磁である。25 は土師器皿 C である。器高は 2.0cm を測り、反転復元したところ、口径が 10.6cm となった。底部は残存していないため法量は不明である。

SK010 出土遺物 (第 23 図)

26 は土師器小皿 B である。器高は 1.7cm を測り口径 7.6cm、底径 5.0cm である。口唇部に煤が付着していることから灯明皿として使用された可能性がある。27 は石製のヘラである。最大長 13.4cm、最大幅 2.4cm、最大厚 1.0cm を測る。28 は土師器小皿 C である。器高は 1.7cm、口径 5.0cm を測る。底部外面に指圧痕が見られる。29 は土師器皿 C である。器高は 1.8cm を測り、内外面ともに黒変部分が見られる。30 は土師器皿 C である。器高は 1.7cm を測り、反転復元したところ、口径が 13.4cm であり、底部外面に黒変部分が見られる。31 は土師器皿 C である。器高は $2.6 + \alpha$ cm を測り、反転復元したところ、口径は 22.4cm となった。32 は平瓦である。

最大長 $8.5 + \alpha$ cm、最大幅 $7.6 + \alpha$ cm、最大厚 2.4cm をはかり内面上部と外面下部に工具による調整痕が見られた。
33 は土鍾である。最大長は 3.7cm、最大幅 1.2cm、最大厚 1.2cm、質量 5.9g を測る。

SK015 出土遺物 (第 23 図)

34 は白磁皿 (森田 E-2 群) である。内外ともに施軸されているが口縁部分は淡褐色である。35 は瓦質土器の鍋である。器高は $9.8 + \alpha$ cm を測り、反転復元したところ、口径が 26.5cm である。外面には横方向のヘラミガキがあるが中央部分から底部にかけて磨滅のため不明瞭である。36 は土師器環 B である。器高は 2.7cm を測り反転復元したところ、口径が 12.2cm、底径が 7.0cm で底部に糸切り離しの痕跡が見られる。37 は土師器環 B である。器高は 2.7cm、口径は 11.0 cm を測る。底部に糸切り離しの痕跡が見られる。38 は土師器環 B である。器高は 2.8cm 底径 6.2cm を測り反転復元したところ口径は 11.8cm となった。底部に糸切り離しの痕跡が見られる。39 は土師器環 B である。器高は 2.7cm を測り、反転復元したところ、口径 12.0cm、底径が 5.8cm である。40 は土師器環 B である。器高は 2.5cm を測り、反転復元したところ、口径が 11.8cm であった。41 は龍泉窯系青磁碗 (上田 E 類) の口縁部である。器高は $3.1 + \alpha$ cm を測り、内外面とも施軸されているが精緻な作りである。42 は土鍾である。最大長は 4.0cm、最大幅 1.6cm、最大厚 1.6cm であり完形品である。

SK020 出土遺物 (第 23・24 図)

43 は備前産陶器擂鉢 (桑岡中世 6 期) である。器高は 11.2cm、底径 12.0cm を測る。内面には擂目が残り、摩耗は少ない。第 24 図 1 は龍泉窯系青磁碗 (上田 E 類) の口縁部分で器高は $2.35 + \alpha$ cm を測り、精緻なつくりである。

SK025 出土遺物 (第 24 図)

2 は土師器皿 C の口縁部である。器高は $2.4 + \alpha$ cm を測り、内外面とも強いヨコナデが見られる。3 は土師器皿 (大内 A 式) である。器高は $2.7 + \alpha$ cm を測り、色調は淡白茶色である。4 は土師器皿 C である。器高は $1.8 + \alpha$ cm を測り、口縁部がやや外側に開くタイプである。5 は土師器皿 C である。器高は $2.2 + \alpha$ cm を測り、内外面に強いヨコナデが見られる。6 は土師器環 B である。器高は $1.5 + \alpha$ cm を測り、底部に糸切り離しの痕跡がある。7 は土師器環 B である。器高は 2.1cm を測り反転復元したところ、口径が 8.7cm、底径が 5.6cm であった。口縁端部には煤が付着している。8 は土師質土器鍋 B である。器高は $5.9 + \alpha$ cm を測り、色調は橙色である。9 は景德鎮窯系青花皿 (小野 B1 群) である。器高は $2.7 + \alpha$ cm で外面にラマ式蓮弁の文様が描かれている。10 は平瓦で最大長 9.1cm、最大幅 6.5cm、最大厚 1.6cm を測る。11 は土鍾である。最大長 $5.0 + \alpha$ cm、最大幅 1.0cm、最大厚 1.1cm、重量は 6.0g を測る。12 は火打石である。

SK030 出土遺物 (第 24 図)

13 は土師器皿 C である。器高は $2.0 + \alpha$ cm を測り、口径は 13.0cm、底径は 5.6cm である。14 は土師器皿 C である。器高は $2.5 + \alpha$ cm を測り反転復元したところ、口径が 13.0cm、底径が 6.0cm であった。15 は土師器小皿 B である。器高は 2.1cm、口径 8.0cm、底径 4.7cm を測り、全体が黒変しており、口縁部に煤が付着している。底部には糸切り離しの痕跡が見られる。16 は土師器皿 C である。器高は 2.5cm を測り、反転復元したところ口径が 13.4cm、底径が 7.1cm であった。17 は土師器環 B である。器高は 2.3cm を測り、反転復元したところ、口径 10.4cm、底径が 6.8cm であった。底部には糸切り離しの痕跡が見られる。18～20 は土鍾である。最大長は $4.0 + \alpha$ cm ～ 4.9cm、最大幅は 1.1 ～ 1.2cm、最大厚は 1.0 ～ 1.1cm である。

SK035 出土遺物 (第 24 図)

21 は土師器皿 C である。器高は $2.1 + \alpha$ cm を測り、内外面とも強いヨコナデが見られる。22 は土師器環 B である。

器高は2.7cm、口径は11.2cm、底径は6.0cmを測る。底部に糸切り離しの痕跡が見られる。23は瓦質の深鉢である。器高は15.0+ α cmを測り、反転復元したところ、底径は31.0cmであった。

SK040 出土遺物（第24図）

24は土師器小皿Aである。器高は1.0cmを測り、反転復元したところ、口径8.2cm、底径7.9cmであった。立ち上がり部分は浅く底部に糸切り離しの痕跡が見られる。25は土師器小皿Aである。器高は1.1cmを測り、反転復元したところ、口径9.4cm、底径7.8cmであった。26は土師器杯Aである。器高は3.6cmを測り、反転復元したところ、口径13.6cm、底径9.5cmであった。27は須恵質土器（東播系）の片口鉢であり器高は3.2+ α cmを測る。

SK040 (075) 出土遺物（第24図）

28は土師器小皿Aである。器高は1.1cmを測り、口径8.4cm、底径6.6cmで底部が厚く立ち上がりが低い。29は土師器小皿Aである。器高は1.4cmを測り底部は厚い。30は須恵質土器（東播系）の片口鉢である。器高は5.5cmを測り反転復元したところ、口径は17.4cm、底径が7.4cmであった。31は石臼の上部である。器高は2.3+ α cmを測り、内面の播目は摩耗している。

SK040 (204) 出土遺物（第24図）

32～34は土師器小皿Aである。器高は1.1～1.4cmを測り、口径は8.4～8.8cm、底径は6.4～7.0cmである。32と33は上下重なった状態で出土し、器高以外は同じ法量であった。35～37は土師器杯Aである。器高は2.6～3.4cmを測り、反転復元から口径は11.3～13.0cmである。36、37には煤が付着している。38は須恵質土器（東播系）の片口鉢である。器高は3.0+ α cmを測り、煤が付着している。39は龍泉窯系青磁の水注又は瓶の胴部と考えられる。器高は4.9+ α cmを測り色調は淡灰緑色で精緻な作りである。40は龍泉窯系青磁の香炉又は蓋である。器高は1.2+ α cmを測り、色調は淡緑色で精緻な作りである。

SK045 出土遺物（第24図）

41は土師器杯Bである。器高は2.0+ α cmを測る。42は土鍾である。最大長6.4cm、最大幅1.3cm、最大厚1.1cmを測る。43は龍泉窯系青磁杯である。底部であり、足先のみ露胎である。44は土師器杯Bである。器高は2.2+ α cmを測り、口縁部に煤が付着している。

SK050 出土遺物（第24図）

45は土師器小皿Aである。器高は1.4cmを測り、口径8.5cm、底径6.1cmである。46は土師器杯Aである。器高は3.2cmを測り、反転復元したところ、口径11.1cm、底径7.6cmであった。47は白磁皿（森田A群）である。器高は2.3cmを測り、反転復元したところ、口径10.0cm、底径6.1cmであった。口縁部は露胎で部分的に煤が付着している。48～51は土師器小皿Aであり、器高はほぼ1.0～1.4cmで49以外は反転復元であるが、口径も8.1～8.8cmとなっている。52、53は土師器杯Aである。器高はそれぞれ3.5、3.2cmであり、52の方が緩やかに立ち上がる。54は吉備系土師器碗である。器高は2.5cmを測り、反転復元したところ、口径は10.8cmであった。内面に丁車なナデが見られる。55は瓦器碗である。器高は2.6+ α cmを測り色調は淡灰色を呈する。

SK080 出土遺物（第24・25図）

56～59は土師器小皿Aである。器高は1.35cmと1.4cmを測り、反転復元したところ、口径8.0～8.9cm、底径5.8～6.7cmであった。60は白磁皿（森田A類）であり、器高は1.8+ α cmで精緻な作りである。第25図1～3は土師器小皿Aである。器高は0.7cm～1.5cmを測り、口径は7.8～8.5cmである。底部が厚く

立ち上がりが高い。4は土師器環Aである。器高は3.9cmを測り反転復元したところ、口径は11.4cm、底径は6.0cmであった。口縁部は緩やかに内湾して立ち上がる。5は土師器環Aである。器高は3.9cmを測り反転復元したところ、口径12.4cm、底径が6.8cmであった。6は土師器環Aである。器高は4.0cmを測り口径は12.2cm、底径は6.1cmである。外面のうち底部から胴部にかけて煤が付着している。7は土師器環Aである。器高は2.8cmを測り口径12.2cm、底径8.2cmを測る。8は吉備系土師器碗である。高台のみであり、器高は1.8+ α cmを測り、反転復元したところ、底径が4.5cmであった。9は吉備系土師器碗である。器高は2.8+ α cmで口径11.0cm、を測る。10は土師質の鍋である。器高は3.0+ α cmで、口縁部のみである。外面に煤が付着している。11は龍泉窯系青磁碗(上田B類)である。器高は2.2+ α cmを測り、外面に蓮弁の上部が見える。12は龍泉窯系青磁碗(上田B類)である。器高は3.6+ α cmを測り、口径は反転復元したところ、16.0cmであった。

SK085 出土遺物 (第25図)

13～17は土師器小皿Aである。器高は1.0～1.8cmを測り、反転復元で口径は7.7cm～8.4cmですべて底部が厚いタイプである。14は底部に摩耗が見られる。18～21は土師器環Aである。器高は3.3～4.0cmを測り反転復元で口径は12.3または12.7cmである。20のみ底部に板状圧痕が見られる。22、23は須恵質土器(東播系)の片口鉢の口縁～胴部である。器高は6.7～7.5cmを測り、反転復元したところ口径は22.4～23.0cmであった。24～29は土師器小皿Aである。器高は1.2～2.0cmを測り、反転復元で口径8.1～9.2cmである。すべて底部が厚いタイプで28・29には板状圧痕が見られる。30～33は土師器環Aである。器高は3.5～3.9cmを測り、反転復元で口径12.2～12.8cmである。34は須恵質土器(東播系)の片口鉢の口縁部であり、器高は5.5+ α cmを測る。35は土師質土器の鍋又は羽釜の胴部～底部である。器高は7.0+ α cmを測り外面には煤の付着が見られる。

SK108 出土遺物 (第25図)

36は土師器小皿Aである。器高は1.5cmを測り、口径8.2cm、底径5.1cmで、底部が厚いタイプである。37は土師器環Aの口縁～胴部である。器高は4.5+ α cmを測り、反転復元したところ、口径13.0cmであった。

SK134 出土遺物 (第25図)

38は土師器環Bである。器高は3.2cmを測り、口径12.6cm、底径6.2cmである。

SD060 出土遺物 (第25・26図)

39は土師器小皿Aである。器高は1.0cmを測り、口径7.2cm、底径6.4cmである。底部に板状圧痕が見られる。40は土師器環Aである。器高は3.1cmを測り、反転復元したところ口径12.5cm、底径9.2cmである。41～56は土師器小皿Aである。完形品を含め、まとまって出土した。器高は0.9～2.7cmを測り、口径8.0～9.0cm、底径5.0～7.0cmであった。57～64は土師器環Aである。こちらも完形品を含めまとまって出土している。器高は2.5～3.7cmを測り、口径11.8～12.8cm、底径6.2～9.1cmであった。65は龍泉窯系青磁の水注又は瓶である。器高は2.5cmを測り色調は淡灰色で精緻な作りである。66は龍泉窯系青磁碗(上田B類)である。器高は3.7+ α cmを測り色調は灰緑色で精緻な作りである。67は龍泉窯系青磁の水注又は瓶である。器高は2.6+ α cmを測り、色調は淡灰色である。68、69は北宋時代の銅銭で、68は嘉祐通寶、69は天聖元寶である。第26図1～5は土師器小皿Aである。完形品を含めまとまって出土した。器高は1.3～1.5cmを測り、口径8.2～8.8cm、底径5.6～7.2cmである。6、7は土師器環Aである。器高は2.9～3.5cmを測り、口径12.1～12.7cm、底径7.1～8.8cmである。8は瓦質土器鍋(B1類)の口縁部である。器高は3.1+ α cmを測り、色調は淡橙色から暗茶色を呈する。

SD065 出土遺物（第26図）

9は鉄製釘である。最大長9.2cm、最大幅2.0cm、最大厚2.0cmで重量は38.4gである。10、11は土師器皿Cである。器高はそれぞれ $2.0 + a$ 、 $1.9 + a$ cmを測り10は橙色、11は淡白茶色を呈する。12、13は瓦質土器火鉢である。器高は12は $2.8 + a$ cm、13は3.9cmを測り、13は外面口縁部にスタンプ文が見られる。14は瓦質土器鉢であり、器高は $4.5 + a$ cmを測る。15は景德鎮窯系青花碗（小野E群）の底部である。器高は $2.9 + a$ cmを測り、精緻な作りである。16は漳州窯系青花皿の底部である。器高は $2.4 + a$ cmを測り、精緻な作りである。17、18は備前産陶器の鉢である。17は器高が $3.8 + a$ cmで口縁部が斜めに立ち上がり、18は器高が12.6cmで口縁部がコの字型に外反している。19、20は平瓦である。それぞれ最大長 $9.6 + a$ cm、30.4cm、最大幅10.8+ a cm、12.9cm、最大厚1.8cm、1.5cmを測る。21、22は土師器皿Cである。器高はそれぞれ $1.1 + a$ cm、 $2.7 + a$ cmを測り、22には煤が付着している。23は軒丸瓦である。最大長 $3.9 + a$ cm、最大幅 $12.3 + a$ cm、最大厚 $3.9 + a$ cmを測る。24は軒平瓦である。最大長 $8.2 + a$ cm、最大幅 $10.7 + a$ cm、最大厚10.6cmを測る。25は楕円形の鉄製品であるが器種は不明である。最大長2.9cm、最大幅3.6cm、最大厚 $0.9 + a$ cmを測る。26は鉄製釘である。最大長5.7cm、最大幅1.5cm、最大厚1.5cmで重量は13.9gである。

SD161 出土遺物（SD065の上層部分）（第26図）

27は備前産陶器播鉢の口縁部である。器高は $4.7 + a$ cmを測る。28は備前産陶器水屋甕（乗岡中世6期～近世1期）の口縁部である。器高は $7.3 + a$ cmで色調は明茶色である。

SD228 出土遺物（第26図）

29、30は土師器小皿Aである。器高はそれぞれ1.1cm、1.4cmを測り30の口唇部の方がやや薄い。31は土師器杯Aである。器高は $4.6 + a$ cmを測り、色調は淡橙色を呈する。32は須恵質土器（東播系）の片口鉢の口縁部である。器高は $2.7 + a$ cmを測り、色調は淡白灰色を呈する。

SP017 出土遺物（第26図）

33は銅銭である。右半分が残存していないため不明であるが、□元通寶又は熙寧元寶と考えられる。

SP023 出土遺物（第26図）

34は土師器皿Cである。器高は2.6cm、口径11.8cmを測り色調はにぶい黄橙色を呈する。

SP074 出土遺物（第26図）

35は白磁碗（大宰府V類）の口縁部である。器高は $2.5 + a$ cmを測り、色調は淡灰黄色を呈する。

SP087 出土遺物（第26図）

36、37は土師器皿Cである。器高はそれぞれ $2.5 + a$ cm、 $2.0 + a$ cmを測り、色調は淡茶白色を呈する。38は瓦質土器碗の口縁部である。器高は $3.2 + a$ cmを測り、色調は淡白色を呈する。

SP191 出土遺物（第26図）

39は土師器皿Cである。器高は $3.1 + a$ cmを測り、色調は淡茶白色を呈する。

SP234 出土遺物（第26図）

40は土師器杯Aである。器高は $3.1 + a$ cmを測り、色調は淡茶白色を呈する。41は砥石である。最大長11.3cm、最大幅6.1cm、最大厚4.0cmで重量は380.8gである。

SX141 出土遺物 (第 27 図)

第 27 図 1 は土師器小皿 A である。器高は 1.2cm を測り、色調は橙茶色を呈する。底部が厚いタイプである。2 は土師器環 A の底部である。器高 1.6+ α cm、底径 6.9cm を測る。3 は吉備系土師器碗で器高 3.4cm、口径 10.6cm、底径 3.8cm を測る。

整地層出土遺物 (第 27 図)

4 は土師器環 A の底部で器高 0.9+ α cm、底径 7.0cm を測る。色調は淡橙白色を呈する。5 は土師質土器鍋 B の口縁部である。器高は 3.8+ α cm を測り、色調は淡橙白色を呈する。6 は土師器小皿 A である。器高は 1.0+ α cm を測り、色調は淡橙白色を呈する。7 は土師器環 A の底部である。器高 1.2+ α cm、底径 6.6cm を測り色調は淡茶白色を呈する。

検出時出土遺物 (第 27 図)

8 は土師器耳皿 B である。底径 3.0cm を測り、色調は橙白色を呈する。9 は瓦質土器羽釜である。器高は 7.4+ α cm を測り、色調は灰青色を呈する。10 は龍泉窯系青磁環の口縁部である。器高は 1.6+ α cm を測る。11 は龍泉窯系青磁香炉である。器高は 1.7+ α cm を測り、内外面に貫入が見られる。12 は龍泉窯系青磁環 (大宰府Ⅲ類) である。器高 2.9cm、口径 12.2cm、底径 5.7cm を測る。13 は龍泉窯系青磁碗 (上田 B 類) の口縁部である。器高 2.5+ α cm を測り色調は灰緑色を呈する。14 は北宋時代の銅銭で皇宋通寶である。書体は真書で比較的明瞭である。15 は白磁皿 (大宰府Ⅳ類) の口縁部である。器高は 2.0+ α cm を測り、色調は灰白色を呈する。16 は龍泉窯系青磁碗 (上田 B 類) の口縁部で、器高 2.1+ α cm、口径 12.6cm を測る。17 は龍泉窯系青磁碗の口縁部～胴部で器高は 4.0+ α cm を測る。18 は龍泉窯系青磁の高台部分であり、碗又は環と考えられる。器高 1.5+ α cm、底径 4.2cm を測る。19、20 は北宋時代の銅銭で 19 は元豐通寶、20 は天禧通寶である。21 は龍泉窯系青磁碗 (上田 B 類) の口縁部である。器高は 2.9+ α cm を測り、外面には鎗蓮弁が見られる。22 は白磁碗 (大宰府Ⅴ類) の口縁部である。器高は 2.5+ α cm を測り、色調は淡灰黄色を呈する。23 は白磁の水注又は壺の頸部である。器高は 2.0+ α cm を測り、色調は淡い灰緑色を呈する。

調査区壁面削時出土遺物 (第 27 図)

24 は土師器小皿 B である。器高 2.4cm、口径 9.0cm、底径 5.0cm を測り、色調は茶褐色を呈する。

カクラン 002 出土遺物 (第 27 図)

25 は土師器皿 C である。器高 2.2cm、口径 13.0cm を測る。色調は暗黄茶色を呈し、内面が部分的に黒変している。26 は同安窯系青磁皿 (大宰府Ⅰ-2b 類) の底部である。器高は 1.1+ α cm を測り、色調は灰緑色を呈する。

カクラン 174 出土遺物 (第 27 図)

27 は軒平瓦である。最大長 2.3+ α cm、最大厚 2.0+ α cm を測り、唐草文である。

第1表 遺構出土遺物一覽表①

[illegible]

第2表 遺構出土土物一覧表②

図番号	遺構番号	出土位置	種類	土色	出土土物	図り合い (図一)	備考	時期	グリッド
39	SP039	第1層	ピット	土色なし 灰褐色土	土師器杯 土師器片、須恵系土師片口縁(東橋系)、須恵系土師片	45-39			J-10+23
40	SP040 (75・204)	第1層	土坑	土色なし S204褐色土 S207灰褐色土 S207灰褐色土	土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、須恵系土師片口縁(東橋系)、瓦質土師片、土壁 土師器杯A・小皿A・土師器片(古代)、須恵系土師片口縁(東橋系)、瓦質土師片、須恵系土師片口縁(東橋系)、瓦質土師片、土壁、灰砂、土、石、鉄釘 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、中国産陶器片、須恵系土師片、須恵系土師片口縁(東橋系)、土、灰砂、土、石 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、中国産陶器片、須恵系土師片、須恵系土師片口縁(東橋系)、土、灰砂、土、石	40(75・204)→ 25-30-10	5-75・204(25-40)の7番部分にあたり、2箇所で掘削を行った。	14世紀前半	J-10+q、d2
41	SP041	第1層	S2000の柱穴f	土色なし 灰褐色土	土師器片、弥生土師片 土師器片、弥生土師片	119-41			J-10-q23
42	SP042	第1層	柱穴	灰褐色土	須恵系土師片	30-42	柱礎あり		J-10-r23
43	SP043	第1層	図100の柱穴f	灰褐色土	土師器片				J-10-q22
44	SP044	第1層	ピット	土色なし 灰褐色土	土師器片、弥生土師片 土師器片	40(75・204)→44			J-10-q23
45	SP045	第1層	土坑	土色なし 暗褐色土 灰褐色土	土師器杯、平瓦、土壁、不規則断片 土師器片(古代)、須恵系土師片、瓦質土師片、土壁 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、須恵系土師片口縁(東橋系)、瓦質土師片、土壁	45-39		16世紀前半	J-10-r23
46	SP046	第1層	ピット	土色なし 灰褐色土	土師器片、須恵系土師片(古代) 土師器片、須恵系土師片(古代)				J-10-r23
47	SP047	第1層	ピット	土色なし 灰褐色土	土師器片、須恵系土師片 土師器片	40(75・204)→47			J-10-q23
48	SP048	第1層	ピット	灰褐色土	土師器片、土師器片				J-10-q23
49	SP049	第1層	ピット	灰褐色土	土師器片口縁				J-10-q24
50	SP050	第1層	土坑	土色なし 暗褐色土 灰褐色土	土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、弥生土師片、須恵系土師片口縁(東橋系)、土壁、土、石、鉄釘 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁			14世紀中葉～ 後葉	J-15-55
51	SP051	第1層	ピット	灰褐色土	土師器片				J-10-q24
52	SP052	第1層	ピット	灰褐色土	土師器片、弥生土師片				J-10-q24
53	SP053	第1層	ピット	土色なし 灰褐色土	土師器片、須恵系土師片 弥生土師片				J-10-q23
54	SP054	第1層	ピット	灰褐色土	土師器杯、土師器片、土師器片、土壁	40(75・204)→54		16世紀後半	J-10-q23
55	SP055	第1層	土坑	土色なし 暗褐色土 灰褐色土	土師器杯、土師器片、土師器片、土壁 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁	180-55-1		16世紀後半	J-10-q25、J-15-61
56	SP056	第1層	ピット	灰褐色土	土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁	40(75・204)→56			J-10-q23
57	SP057	第1層	ピット	土色なし 灰褐色土	土師器杯A・小皿A 土師器片、土師器片	40(75・204)→57			J-10-q23
58	SP058	第1層	ピット	土色なし 灰褐色土	土師器杯、瓦質土師片 土師器杯	25-58		16世紀中葉～ 後葉	J-10-q22
59	SP059	第1層	S2000の柱穴g	土色なし 灰褐色土	土師器片、弥生土師片 土師器片、弥生土師片				J-10-q23
60	SP060	第2層	溝状遺構	土色なし 暗褐色土 灰褐色土	土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁			14世紀前半	J-15-a・15
61	SP061	第1層	S2115の柱穴b	土色なし 灰褐色土	土師器片、弥生土師片 土師器片				J-10-q24
62	SP062	第1層	ピット	土色なし 灰褐色土	土師器片 土師器片				J-10-q23
63	SP063	第1層	ピット	土色なし 灰褐色土	土師器片、弥生土師片 土師器片	30-63			J-10-q23
64	SP064	第1層	S2065の柱穴e	灰褐色土 土色なし	土師器片 土師器片、土師器片、土師器片、土壁				J-10-q24
65	SP065	第1層	溝状遺構	暗褐色土 灰褐色土	土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁	70・228・236-65 →1・226		16世紀後半	J-15-q→r2
66	SP066	第1層	ピット	土色なし 灰褐色土	土師器片、弥生土師片 土師器片、土壁	40(75・204)→66			J-10-q23
67	SP067	第1層	ピット	土色なし 灰褐色土	土師器片 弥生土師片				J-10-q23
68	SP068	第1層	S2000の柱穴c	土色なし 灰褐色土	土師器片 土師器片				J-10-r24
69	SP069	第1層	S2065の柱穴f	灰褐色土 土色なし	土師器片、弥生土師片 土師器片、土師器片(古代)、瓦質土師片、土壁				J-10-q23
70	SP070	第1層	井戸跡	灰褐色土(井戸跡内) 灰褐色土(井戸跡内) 灰褐色土(井戸跡内) 灰褐色土(井戸跡内)	土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁 土師器杯A・小皿A、須恵系土師片(古代)、瓦質土師片、土壁	70-40-61		15世紀前半～ 16世紀前半	J-15-q2・3
71	SP071	第1層	図100の柱穴f	灰褐色土	土師器片	40(75・204)→71			J-10-q23
72	SP072	第1層	ピット	灰褐色土	土師器片				J-10-r23

第3表 遺構出土遺物一覧表③

遺構番号	遺構番号	出土品	種類	土色	出土遺物	切り取り (西一側)	備考	時期	グリッド
73	SP073	第1層	柱穴	土色なし 暗灰色土(柱底) 赤灰色土	土師器片 遺物なし 土師器片		柱底あり		J-10-r24
74	SP074	第1層	ビッド	赤灰色土	土師器片				J-10-r24
75	SP075	第2層	土坑(SB090の 下層部)	赤灰色土	土師器片				J-10-p・r23
76	SP076	第1層	SB090の柱穴A	赤灰色土	土師器片				J-10-r24
77	SP077	第1層	SB100の柱穴A	赤灰色土	土師器片				J-10-r24
78	SP078	第1層	SB110の柱穴A	赤灰色土	土師器片C、大内式片・玉砂利				J-10-r24
79	SP079	第1層	SB100の柱穴C	土色なし 赤灰色土	土師器片、弥生土器片 土師器片、弥生土器片、玉砂利				J-10-r24
80	SP080	第2層	土坑	土色なし 暗灰色土	土師器片A・小皿A、白磁器(高脚杯類) 土師器片A・小皿A、土師器之器脚A、弥生土器、越前系土器 (土師器)、弥生土器(高脚杯類)	40-221		14世紀前半	J-15-r・17
81	SP081	第1層	SB115の柱穴C	土色なし 赤灰色土	土師器片、弥生土器片 土師器片C、弥生土器(高脚杯類)				J-10-r24・25
82	SP082	第1層	ビッド	赤灰色土	土師器片			15世紀末葉～ 16世紀初葉	J-10-r24
83	SP083	第1層	SB090の柱穴F	土色なし 赤灰色土	土師器片C、玉砂利 土師器片			16世紀前半	J-10-r24
84	SP084	第1層	ビッド	土色なし 赤灰色土	土師器片 土師器片、土師器之器片、瓦質土器片				J-10-r24
85	SP085	第2層	土坑	土色なし 暗灰色土	土師器片A・宮内系系・小皿A、土師器之器脚A、弥生土器片口縁(東播磨系)、土器、鉄釘 土師器片A・小皿A、弥生土器片口縁(東播磨系)、土師器之器脚A・弥生土器片口縁、土器、鉄釘			14世紀前半	J-15-r4
86	SP086	第1層	ビッド	土色なし 赤灰色土	土師器片 土師器片				J-10-r24
87	SP087	第1層	ビッド	土色なし 赤灰色土	土師器片C、瓦器類 土師器片C			16世紀後半～ 末葉	J-10-r24
88	SP088	第1層	ビッド	土色なし 赤灰色土	土師器片 土師器片	40(75・204)→88			J-10-r23
89	SP089	第1層	柱穴	暗灰色土(柱底) 赤灰色土	土師器片 土師器片	40(75・204)→89	柱底あり		J-10-r23
90	SB090	第1層	竪立柱遺物跡			45→90(5番号なし)	5-21・41・59・ 67・78・82・108 が柱穴として該当 する。5-21・ 82・108から土師 器片Cが出土。	16世紀中葉～ 末葉	J-10-r・r22～ 24
91	SP091	第1層	ビッド	赤灰色土	土師器片、土器				J-10-r24
92	SP092	第1層	ビッド	赤灰色土	土師器片				J-10-r24
93	SP093	第1層	ビッド	土色なし 赤灰色土	土師器片 土師器片C				J-10-r24
94	SP094	第1層	ビッド	土色なし 赤灰色土	土師器片、平瓦 土師器片、平瓦、鉄釘				J-10-r23・24
95	SB095	第1層	竪立柱遺物跡			45→95(5番号なし)、39→ 96(121)、15→ 95b	5-28・64・69・ 121が柱穴として 該当する。	16世紀後半～ 末葉	J-10-r・r22～ 24
96	カクラン	第1層	カクラン	灰黄褐色土ブロック層	弥生土器、弥生土器片(土器)、玉砂利、土器、モルタル、タイル			現代	J-10-r・r24・ 25
97	SP097	第1層	SB105の柱穴C	土色なし 赤灰色土	土師器片 土師器片	40(75・204)→95 →97			J-10-r23・23
98	SP098	第1層	ビッド	赤灰色土	土師器片	40(75・204)→98			J-10-r23
99	SP099	第1層	柱穴	暗灰色土(柱底) 赤灰色土	遺物なし 土師器片C	10→99	柱底あり		J-10-r23
100	SB100	第1層	竪立柱遺物跡			100a(5番号なし)→ 15、100b(5番号 なし)→10、 40(75・204)→ 100f(71)・g (184)	5-18・71・77・ 79・184が柱穴と して該当する。	15世紀末葉～ 16世紀前半	J-10-r・r22～ 24
101	SP101	第1層	SB090の柱穴A	暗灰色土(柱底) 赤灰色土	遺物なし 土師器片C、弥生土器片	101→3	柱底あり	16世紀中葉～ 末葉	J-10-r23
102	SP102	第1層	SB105の柱穴A	暗灰色土(柱底) 赤灰色土	土師器片 土師器片、瓦質土器片	40(75・204)→102	柱底あり		J-10-r23
103	SK103	第1層	土坑	土色なし 灰黄褐色土	土師器片 土師器片、瓦質土器片				J-15-r2・4
104	カクラン	第1層	カクラン	灰黄褐色土ブロック層	土師器片C、モルタル、レンガ			現代	J-15-r3
105	SB105	第1層	竪立柱遺物跡			40(75・204)→ 105→105b(5番号 なし)、40(75・ 204)→35→105a (5番号なし)、 40(75・204)→ 105d、40(75・ 204)→105e (102)	5-34・87・102・ 117が柱穴として 該当する。5-23 から土師器片B・ 大内式片、5-100 から土師器片Bが 出土している。	15世紀末葉～ 16世紀前半	J-10-r22・23
106	SP106	第1層	ビッド	土色なし 赤灰色土	遺物なし 土師器片大内式片				J-15-r3

第4表 遺構出土遺物一覧表④

図号	遺構番号	出土層	種別	土色	出土遺物	図号	備考	時期	グリッド
107	カウラン	第1層	カウラン	灰黄褐色土ブロック層	土師器片、漆器片(古代)、瓦質土器片、モルタル			現代	J-15-a3
108	SK100	第1層	土坑	土色なし 灰黄褐色土	土師器片A、小皿入、土師器土器片	108→111		14世紀前半～ 中葉	J-15-a・17
109	SP109	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片				J-15-a7
110	SP110	第1層	竪立柱礎跡			55→108→110e (5 番号なし) →11	5→78・153・ 167・218が柱穴と して該当する。5 →78から土師器 と大内式皿、 167から土師器 皿、218から吉備 土師器片が出土 している。	16世紀中葉～ 後葉	J-10-p24・25 →J-15-p1
111	SP111	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片	111→9			J-15-a7
112	SK112	第1層	溝まり状遺構	土色なし 灰黄褐色土	土師器片、弥生土器片	112→9			J-15-a6
113	SK113	第1層	土坑	土色なし 灰黄褐色土	土師器片	132→113			J-15-a6
114	SP114	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片				J-15-a6
115	SP115	第1層	竪立柱礎跡			108→115d (56) →11, 115e (100) →55→11, 115e (150) →11		16世紀中葉	J-10-p24・25 →J-15-p1
116	カウラン	第1層	カウラン	灰黄褐色土ブロック層	土師器片、五砂利、土管	141→116		現代	J-15-a・15
117	SP117	第1層	SK005の柱穴C	土色なし 灰黄褐色土	土師器片、土壁	117→35			J-10-p23
118	SP118	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片、鉄釘	118→35			J-10-p23
119	SP119	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片	119→41			J-10-p23
120	SA120	第1層	溝状遺構						J-10-q・r24
121	SP121	第1層	SK005の柱穴d	土色なし 灰黄褐色土	土師器片(古代)、五砂利	30→121			J-10-p24
122	SP122	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片				J-10-p24
123	SP123	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片、弥生土器片				J-15-a4
124	SP124	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片	124→30			J-10-q・r24
125	SA125	第1層	溝状遺構				5→49・60が柱穴 として該当する。 5→49・60から土 師器片が出土し ている。	16世紀中葉～ 後葉	J-10-p・q24
126	SP126	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片	126→30		16世紀中葉	J-10-r23
127	SP127	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片	127→30			J-10-p23
128	SP128	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片	128→30			J-10-p23
129	SP129	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片	131→129→15			J-10-p22
130	SA130	第1層	溝状遺構				5→146・154・ 159・166が柱穴 として該当する。5 →146・154から土 師器片、159から 土師器片が出土 している。	16世紀後葉	J-10-p25・J- 15-p1・2
131	SP131	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片、弥生土器、五砂利	131→129→15			J-10-p22
132	SK132	第1層	溝まり状遺構	土色なし 灰黄褐色土	土師器片	132→113			J-15-a5・6
133	SP133	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片				J-15-p3
134	SK134	第1層	土坑	土色なし 灰黄褐色土	土師器片A、大内式式片、瓦質土器欠片、龍鳳瓦片、五砂利	134→1		15世紀末葉～ 16世紀前半	J-15-p3
135	文書								
136	SP136	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片				J-15-p1・2
137	カウラン	第1層	カウラン	灰黄褐色土ブロック層	土師器小皿入、ガラス片	137→1		現代	J-15-p3
138	SK138	第1層	溝まり状遺構	土色なし 灰黄褐色土	土師器片				J-15-a・a3
139	SP139	第1層	ピット	土色なし 灰黄褐色土	土師器片				J-15-p2
140	文書								

第5表 遺構出土遺物一覧表③

遺構番号	出土品	種類	土色	出土遺物	取り出し (西→東)	備考	時期	グリッド
141	SP141	第1層	溜まり状遺構	土色なし 灰黄褐色土	土師器ⅡA 土師器ⅡA・吉原系・小皿A	141→50・116	14世紀前半	J-15-q・15
142	SP142	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器ⅡB、瓦質土器片			J-15-p1
143	SP143	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	土師器Ⅱ 土師器ⅡB、瓦質土器片、五砂利			J-15-p1
144	SP144	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器Ⅱ			J-15-p1
145	穴倉							
146	SP146	第1層	SP115の柱穴	土色なし 黄灰色土	土師器Ⅱ 土師器ⅡB			J-15-p1
147	カラン	第1層	カラン	灰黄褐色土ブロック層	土師器ⅡB、ⅡC、土師器土器片、弥生土器片、モルタル	140・141→147	現代	J-15-q・q2
148	SP148	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	土師器Ⅱ 遺物なし	140→147		J-15-q2
149	SP149	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器ⅡA×ⅡB			J-10-q25
150	穴倉							
151	SP151	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	遺物なし 備前産陶器破片(東周中部2期)			J-10-r25
152	SP152	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	土師器Ⅱ 土師器ⅡC、関東系青磁片			J-10-r25
153	SP153	第1層	SP110の柱穴	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器Ⅱ			J-15-p1
154	SP154	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器Ⅱ、土師器土器片、鉄釘			J-15-q2
155	穴倉							
156	SP156	第1層	SP115の柱穴	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器ⅡB	160→156		J-10-q25
157	SP157	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	土師器ⅡB 土師器ⅡB、大内A式片、土師器土器片、瓦質土器片、鉄釘、五砂利			J-15-p1
158	SP158	第1層	SP115の柱穴	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器Ⅱ、平瓦、火打石	150→1		J-10-q24
159	SP159	第1層	柱穴	土色なし 黄灰色土	遺物なし 遺物なし		礎石あり、写真集 を参照	J-10-r25
160	穴倉							
161	SP161(55)	第1層	溝状遺構 (3-65の上層)	土色なし	土師器ⅡB、瓦質土器片、丸瓦・平瓦、備前産陶器破片・水置(東周中部2期→室町1期)	161(55)→147 →25	3-65の上層部に ある	J-15-q・q2
162	SP162	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器Ⅱ、鉄釘・不明鉄製品			J-10-q23
163	SK163	第1層	溜まり状遺構	土色なし 灰黄褐色土	土師器ⅡA、ⅡB、ⅡC			J-15-r4
164	穴倉							
165	穴倉							
166	SP166	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	土師器Ⅱ 土師器ⅡB、土壁、鉄釘、五砂利		16世紀前半	J-15-p1
167	SP167	第1層	SP110の柱穴	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器Ⅱ		16世紀中葉～ 後葉	J-15-p1
168	SK168	第1層	土境	土色なし 灰黄褐色土	瓦質土器片			J-10-q・q25
169	カラン	第1層	カラン	灰黄褐色土ブロック層	土師器ⅡA、土師器土器片、土壁		現代	J-15-r4
170	穴倉							
171	SP171	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器ⅡB		16世紀前半	J-15-r4
172	SP172	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器Ⅱ			J-15-r4
173	SP173	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器ⅡA・小皿A			J-15-r4
174	カラン	第1層	カラン	灰黄褐色土ブロック層	土師器ⅡC、土師器土器破片×鉄、軒平瓦・丸瓦・平瓦、備前産陶器片、鉄釘、土壁	176→174	現代	J-15-q・r2
175	穴倉							
176	SP176	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	土師器Ⅱ土器片、弥生土器片	176→174		J-15-r2
177	SP177	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	土師器Ⅱ、備前産陶器破片(東周中部2～3期)		16世紀後半	J-15-r2
178	SD178	第1層	溝状遺構	土色なし 灰黄褐色土	土師器ⅡB、ⅡC、中A(ⅡC)代、瓦質土器片、平瓦 土師器Ⅱ、土師器土器片、瓦質土器破片、五砂利 土師器ⅡC、大内A式片			J-15-r1・2
179	カラン	第1層	カラン	灰黄褐色土ブロック層	土師器ⅡB、ⅡC、大内A式片、瓦質土器片、備前産陶器片、肥前系 陶器破片		現代	J-15-q・r2
180	穴倉							
181	SP181	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器Ⅱ、五砂利			J-15-q・r1
182	SP182	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器Ⅱ、瓦片			J-15-r1
183	カラン	第1層	カラン	灰黄褐色土ブロック層	土師器Ⅱ、五砂利、土壁		現代	J-15-q・r1
184	SP184	第1層	SP100の柱穴	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器Ⅱ、瓦質土器破片(肥前系)、瓦器破	184→27		J-10-q23
185	穴倉							
186	SP186	第1層	ビット	土色なし 黄灰色土	遺物なし 土師器Ⅱ、瓦質土器片、土壁			J-15-q1

第6表 遺構出土遺物一覧表⑥

図号	遺構番号	出土層	種類	土色	出土遺物	埋りかき (西-東)	備考	時期	グリッド
187	SP187	第1層	ビット	土色なし 灰褐色土	遺物なし 土師器片、中国南部産陶器片				J-18-q1
188	SP188	第1層	ビット	土色なし 灰褐色土	遺物なし 中瓦、陸奥系青磁碗、備前産陶器片、新塩土器(六連鳥式)				J-18-p1
189	SK189	第1層	溜まり状遺構	土色なし 灰褐色土	土師器片C 土師器片、陸奥系青磁碗(上部C層)、土壘				J-18-q1
190		欠番							
191	SP191	第1層	ビット	土色なし 灰褐色土	遺物なし 土師器片C			15世紀後半	J-18-q1
192	SP192	第1層	ビット	土色なし 灰褐色土	遺物なし 土師器片B、土壘				J-18-q1
193	SP193	第1層	5B115の柱穴a	土色なし 灰褐色土	遺物なし 土師器片B、瓦質土器片、備前産陶器碗、鉄釘	193-55			J-18-p1
194	SP194	第1層	ビット	土色なし 灰褐色土	土師器片、中瓦、土壘				J-18-q25、J-18-q1
195		欠番							
196	SP196	第1層	ビット	土色なし 灰褐色土	遺物なし 土師器片、須恵器片(古式)				J-18-q1
197	SP197	第1層	ビット	土色なし 灰褐色土	土師器片 土師器片、瓦質土器鉢、白磁碗×皿(大宰府地区×面影型)、土壘				J-18-q25
198	SP198	第1層	ビット	土色なし 灰褐色土	土師器片B、五砂利 土師器片B、瓦質土器片				J-18-q25
199	SP199	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片、土師灰土器碗鉢	40(75・204)→199			J-18-p23
200		欠番							
201	SP201	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片	40(75・204)→201			J-18-p23
202	SP202	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片A、土壘	40(75・204)→202			J-18-p23
203	SP203	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片B				J-18-q22
204	SK204	第2層	土坑(S3040の下層部)						J-18-p23
205		欠番							
206	SP206	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片				J-18-r24
207	SP207	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片、瓦質土器片				J-18-r24
208	SP208	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 鉄釘				J-18-q23
209	SP209	第2層	柱穴	土色なし 褐色土(柱穴) 褐色土	遺物なし 土師器片 土師器片、土壘		柱穴あり		J-18-q23
210		欠番							
211	SP211	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片				J-18-q24
212	SP212	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片A×B				J-18-q24
213	SP213	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 須恵器(古式)				J-18-q24
214	SP214	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片、弥生土器片				J-18-q24
215		欠番							
216	SP216	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片				J-18-q24
217	SP217	第2層	土坑	土色なし 褐色土	砂器片 土師器片、土壘				J-18-q24
218	SP218	第2層	5B110の柱穴a	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片(須恵系)				J-18-q24
219	SK219	第2層	土坑	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片				J-18-a8
220		欠番							
221	SP221	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器小皿A	80-221			J-18-a7
222	SP222	第2層	ビット	土色なし 褐色土	土師器土器鉢A				J-18-a6・7
223	SP223	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器土器片				J-18-a6
224	SP224	第2層	ビット	土色なし 褐色土	土師器片 遺物なし				J-18-a6
225		欠番							
226	SP226	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片C、土師器土器碗鉢、鉄釘	226-45			J-18-q2
227	SP227	第2層	ビット	土色なし 褐色土	遺物なし 土師器片、備前産陶器片、土壘、五砂利、唐 土師器片A・小皿A、土師器土器片、甕				J-18-p24
228	SK228	第2層	溝状遺構	土色なし 灰褐色土	土師器片A・小皿A、土師器土器片(口縁(東橋系))、瓦質土器片、弥生土器片、備前産陶器片、甕	228-45・228		14世紀末頃 ～15世紀初頃	J-18-q1→2

第7表 遺構出土遺物一覽表⑦

図号	遺構番号	出土品	種類	土色	出土遺物	切り合い (西→東)	備考	時期	グッド
Z29	SF229	第2層	ピット	土色なし 灰褐色土	遺物なし 土師器片a(古代)				J-15-a4
Z30		穴倉							
Z31	SK231	第2層	土坑	土色なし 暗褐色土	土師器片 土師器片A				J-15-a6
Z32	SF232	第2層	柱穴	土色なし 暗褐色土(経周) 黄灰色土	遺物なし 土師器片		柱痕あり		J-15-a・r1
Z33	SF233	第2層	柱穴	土色なし 暗褐色土(経周) 黄灰色土	遺物なし 土師器片A		柱痕あり		J-15-a8
Z34	SF234	第2層	ピット	土色なし 灰褐色土	土師器片A、弥生土器片、磁石				J-15-r3
Z35		穴倉							
Z36	SF236	第2層	ピット	土色なし 暗褐色土	遺物なし 土師器片B	236-65			J-15-r2
Z37	SF237	第2層	柱穴	土色なし 暗褐色土(経周) 黄灰色土	遺物なし 土師器片				J-15-g1
Z38	SF238	第2層	ピット	土色なし 暗褐色土	遺物なし 土師器土器片	238-238			J-15-g3
竪地溝				暗褐色土	土師器片B、瓦葺土器片、平瓦、玉砂利	黄褐色土→暗褐色土→一段灰褐色土	14世紀前期	調査区中央	
竪地溝				暗褐色土	土師器片A、漆器墨書(古代)、土師瓦土器類、瓦葺土器片A、平瓦、漆灰産物産物、玉砂利	黄褐色土→暗褐色土→一段灰褐色土	14世紀前期	調査区中央	
竪地溝				黄褐色土	土師器片A、小皿A、土師瓦土器片、瓦葺土器片、土盤	黄褐色土→一段黄褐色土→一段灰褐色土	14世紀前期	調査区中央	
道横堀出時				黄褐色土	土師器片A・F16・B2・C2、大内式小皿・小皿A・小皿B・耳皿B、漆器墨書(金)(古代)、土師瓦土器類、須恵焼・火鉢、瓦葺土器片A、磁鉢・鉢×香炉・丹塗、瓦葺土器片A・平瓦・平瓦、龍泉系青瓷碗(大宰府外産品)、銀×外付(中世初半葉〜中世前期)、銅上印籠(中世)、香炉、白磁土(大宰府産Y緑)、黒龍宮黄磁片、中瀬南産陶器群、横都賀陶器群(美濃中世早期5-6期)、耳皿、瀬戸黄褐色陶器群、赤湾産陶器片、土盤・土釜、火打石、玉砂利・角島産黒曜石片、鉄釘、銅鏡「聖武通寶」、土甕			J-10グリッド	
道横堀出時				黄褐色土	土師器片A・F16・B2・C2、小皿A・小皿B、漆器墨書(古代)、漆器瓦土器片口縁(横須系)、土師瓦土器類、火鉢、瓦葺土器片、弥生土器片、丸瓦、龍泉系青瓷碗(大宰府外産品)、銀上印籠(中世)、燵・燈、阿奈系黄磁片、白磁土(大宰府産)、豊後国系黄花田、津州製黄花田盆、中国産褐釉唾壺、横都賀陶器群(美濃中世早期)、東海産陶器片、高松陶器土流、肥前系磁器片付片、土盤、鉄釘、銅鏡「天智通寶」、「天徳通寶」、磁石、玉砂利、土甕			J-15グリッド	
道横堀出時				黄灰色土	土師器片A・F16・B2・C2、土師瓦土器片、玉砂利				J-10グリッド
道横堀出時				黄灰色土	土師器片A・F16・B2・C2、漆器墨書・小皿A・小皿B・B2(中世)、漆器墨書(古代)、土師瓦土器類、瓦葺土器類、弥生土器片、平瓦、龍泉系青瓷碗(大宰府外産品)、白磁土(大宰府産Y緑)、木土釜、横都賀陶器群・小皿A・黄褐色陶器片、土盤・土甕、白磁土器、玉砂利			J-15グリッド	
調査区壁面掘時					土師器片A・F16・B2・C2、小皿A・小皿B・白色土器片、龍泉系青瓷(代)、土師瓦土器片A、瓦葺土器片、丸瓦・平瓦・万叶瓦、龍泉系青瓷碗(大宰府外産品)、横都賀陶器片、肥前系磁器片付、土盤、玉砂利、タイル・土甕				

第8表 遺構出土土物観察表①

図録番号	遺構番号	種類	形状	通高(cm)			色調・紋様	胎土	測厚・測径		備考	分析箇所	図号		
				口径・底径	高さ	口縁・底縁			内径	外径					
第23図-1	5B000/S3P01 灰褐色土 (1)	土師器	鉢	—	4.9㎝	—	赤・褐色・灰・黄褐色	黄赤・角閃石・石炭	径方10.5㎝	32.7㎝			R001		
第23図-2	5B000/S3P02 灰褐色土 (2)	土師器	鉢	—	1.9㎝	—	黄褐色	角閃石	ナデ・32.7㎝	ナデ	底面系	底心	R001		
第23図-3	5B000/S3P03 灰褐色土 (3)	土師器	鉢	—	1.9㎝	—	淡灰褐色	黄褐色	ナデ・径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R002		
第23図-4	5B000/S3P03 灰褐色土 (3)	土師器	鉢	(12.4)	2.0	(8.4)	—	淡褐色	石炭・黄褐色・赤色粘土	ナデ・径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-5	5B000/S3P04 灰褐色土 (4)	土師器	鉢	—	2.1㎝	—	—	淡灰白色	石炭・角閃石	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-6	5B100/S3P184 赤褐色土 (1)	土師器	坪	(18.1)	4.0	(10.4)	—	淡灰褐色	石炭・角閃石・黄褐色・黄褐色・白色粘土・角閃石	ナデ・径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-7	5B100/S3P184 赤褐色土 (2)	瓦蓋土	覆鉢	—	5.3㎝	—	—	灰白色	砂粒少し・白色粘土・長石含む	径32.7㎝	径32.7㎝	内面にすり目状		R002	
第23図-8	5B100/S3P102 赤褐色土 (1)	土師器	坪	—	1.7㎝	—	—	褐色	石炭・黄褐色	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-9	5B100/S3P102 赤褐色土 (2)	土師器	坪	—	1.7㎝	—	—	淡灰褐色	長石・白色粘土・石炭	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-10	5B110/S3P187 赤褐色土 (1)	土師器	鉢	12.2	2.0㎝	—	—	黄白色	石炭・黄褐色・白色粘土	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-11	5B115/S3P091 赤褐色土 (1)	土師器	鉢	—	2.0㎝	—	—	黄褐色・淡灰褐色	黄褐色	ナデ・径32.7㎝	ナデ・径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-12	5B115/S3P136 赤褐色土 (2)	土師器	坪	—	1.9㎝	—	—	淡褐色	石炭・赤色粘土	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-13	5E370	土師器	坪	(8.0)	2.5	(3.4)	—	淡褐色	角閃石・赤色粘土	一方角閃石ナデ・径32.7㎝	径32.7㎝	口縁より上付着	坪面	R001	
第23図-14	5E370	黄褐色	鉢	—	3.5㎝	—	—	淡褐色	白色で黄褐色土・褐色粘土	径32.7㎝	径32.7㎝	内・外面に黄入部	上底面	R002	
第23図-15	5E370	瓦類	平瓦	12.6㎝	8.8㎝	1.9	—	灰色	白色粘土・赤色粘土	ナデ	ナデ	上底面	底心	R002	
第23図-16	5E370	瓦類	平瓦	8.2㎝	7.1㎝	1.2㎝	—	褐色	白色粘土	ナデ	ナデ	上底面	底心	R004	
第23図-17	5E370 埴輪彩色土	埴輪彩色土	鉢	—	2.6㎝	—	—	淡褐色	黄褐色	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-18	5E370 埴輪彩色土	埴輪彩色土	鉢	—	1.8㎝	—	—	淡褐色	灰白色で黄褐色土・褐色粘土	径32.7㎝	径32.7㎝	内・外面に黄入部	底面	R002	
第23図-19	5E370 埴輪彩色土	瓦類	平瓦	16.1㎝	11.6㎝	1.9	—	褐色	白色粘土・赤色粘土	ナデ	ナデ	釘穴状	底心	R004	
第23図-20	5E370 灰褐色土	土師器	坪	(9.2)	1.8	(3.2)	—	黄褐色	黄褐色	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-21	5E370 灰褐色土	土師器	鉢	—	3.7㎝	—	—	淡褐色	角閃石・赤色粘土	ナデ	ナデ	底面系	底心	R002	
第23図-22	5E370 灰褐色土	土師器	坪	(7.4)	1.5	3.8	—	淡褐色・黄褐色	赤色粘土	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-23	5E370 灰褐色土	瓦類	平瓦	10.3㎝	8.7㎝	2.1	—	灰色	白色粘土	ナデ	ナデ	上底面	底心	R004	
第23図-24	5K005 埴輪彩色土	白磁	鉢	—	1.6㎝	—	—	淡褐色	黄褐色の黄褐色土含む	径32.7㎝	径32.7㎝	口縁部には黄褐色の口	底面	R002	
第23図-25	5K005 埴輪彩色土	土師器	鉢	(10.6)	2.0	—	—	淡褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	底面系	底心	R001	
第23図-26	5K010	土師器	小皿	7.6	1.7	5.0	—	黄褐色	長石・角閃石・赤色粘土	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R004	
第23図-27	5K010	石製品	小皿	13.4	2.4	1.0	31.7	—	—	—	—	口縁部には黄褐色の口	底面	R002	
第23図-28	5K010 埴輪彩色土	土師器	小皿	5.0	1.7	—	—	黄褐色	赤色粘土	ナデ	ナデ	底面系	底心	R004	
第23図-29	5K010 埴輪彩色土	土師器	鉢	—	1.8	—	—	黄褐色・黄褐色	黄褐色	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R002	
第23図-30	5K010 埴輪彩色土	土師器	鉢	(12.4)	1.7	—	—	黄褐色	長石・赤色粘土	ナデ・径32.7㎝	ナデ・径32.7㎝	底面系	底心	R002	
第23図-31	5K010 埴輪彩色土	土師器	鉢	(22.4)	2.6	—	—	黄褐色	角閃石少し・黄褐色土・黄褐色土	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-32	5K010 埴輪彩色土	瓦類	平瓦	8.5	7.6	2.4	—	黄褐色	角閃石・黄褐色・赤色粘土	ナデ	ナデ	上底面	底心	R004	
第23図-33	5K010 埴輪彩色土	土師器	鉢	3.7	1.2	1.2	5.3	淡褐色	黄褐色・白色粘土	ナデ	ナデ	口縁部には黄褐色の口	E-2	R005	
第23図-34	5K015	白磁	鉢	—	1.5	—	—	淡褐色	黄褐色の黄褐色土含む	径32.7㎝	径32.7㎝	口縁部には黄褐色の口	E-2	R005	
第23図-35	5K015	瓦類	鉢	(26.5)	9.8	—	—	黄褐色	長石・角閃石・赤色粘土	径方10.5㎝	径方10.5㎝	底面系	底心	R004	
第23図-36	5K015 埴輪彩色土	土師器	坪	(12.2)	2.7	(7.0)	—	淡褐色	角閃石・赤色粘土	ナデ・径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R004	
第23図-37	5K015 埴輪彩色土	土師器	坪	11.0	2.7	—	—	淡褐色	赤色粘土・長石・角閃石	ナデ・径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-38	5K015 埴輪彩色土	土師器	坪	(11.8)	2.8	6.2	—	黄褐色	長石・角閃石	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R002	
第23図-39	5K015 埴輪彩色土	土師器	坪	(12.0)	2.7	(3.8)	—	淡褐色	角閃石・赤色粘土	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R003	
第23図-40	5K015 埴輪彩色土	土師器	坪	(11.8)	2.5	7.0	—	淡褐色	赤色粘土・角閃石	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R005	
第23図-41	5K015 埴輪彩色土	土師器	鉢	—	3.1㎝	—	—	淡褐色	黄褐色	ナデ・径32.7㎝	ナデ	上底面	底心	R007	
第23図-42	5K015 埴輪彩色土	土製品	土鉢	4.0	1.8	1.0	10.1	黄褐色	石炭・白色粘土	—	ナデ	底面系	底心	R008	
第23図-43	5K020	黄褐色	覆鉢	—	11.2	12.0	—	淡褐色・黄褐色	長石・白色粘土	32.7㎝・径32.7㎝	32.7㎝・径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-44	5K020 埴輪彩色土	埴輪彩色土	覆鉢	—	2.15	—	—	淡褐色	黄褐色	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-45	5K025	土師器	鉢	—	2.4㎝	—	—	淡褐色	石炭・黄褐色・角閃石・白色粘土	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-46	5K025	土師器	鉢	—	2.7㎝	—	—	淡灰白色	石炭	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R002	
第23図-47	5K025 埴輪彩色土	土師器	鉢	—	1.8㎝	—	—	白色	石炭・角閃石・黄褐色・赤色粘土	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-48	5K025 埴輪彩色土	土師器	鉢	—	2.2㎝	—	—	淡褐色	石炭・黄褐色・白色粘土	ナデ・径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R002	
第23図-49	5K025 埴輪彩色土	土師器	坪	—	1.5㎝	—	—	黄褐色	石炭・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R004	
第23図-50	5K025 埴輪彩色土	土師器	坪	(8.7)	2.1	(3.8)	—	黄褐色	石炭・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	ナデ・径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R003	
第23図-51	5K025 埴輪彩色土	土師器	鉢	—	5.3㎝	—	—	褐色	石炭・赤色粘土・白色粘土	ナデ・径32.7㎝	ナデ	底面系	底心	R006	
第23図-52	5K025 埴輪彩色土	埴輪彩色土	鉢	—	2.7㎝	—	—	淡褐色	黄褐色	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-53	5K025 埴輪彩色土	瓦類	平瓦	9.1	6.5	1.6	—	黄褐色	白色粘土・赤色粘土	ナデ	ナデ	上底面	底心	R002	
第23図-54	5K025 埴輪彩色土	土製品	土鉢	5.0	1.9	1.1	6.0	淡褐色・黄褐色	石炭・角閃石	—	ナデ	底面系	底心	R001	
第23図-55	5K030	土師器	鉢	—	3.9	3.0	3.2	30.8	—	—	—	底面系	底心	R007	
第23図-56	5K030	土師器	鉢	(13.0)	2.0	(3.6)	—	淡灰白色	石炭・黄褐色・白色粘土	ナデ・径32.7㎝	ナデ・径32.7㎝	底面系	底心	R002	
第23図-57	5K030	土師器	鉢	(13.0)	2.5	(8.0)	—	黄白色	石炭・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土・角閃石	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R002	
第23図-58	5K030 埴輪彩色土	土師器	小皿	8.0	2.1	6.7	—	淡褐色	石炭・黄褐色・白色粘土	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R002	
第23図-59	5K030 埴輪彩色土	土師器	鉢	(13.4)	2.5	(7.1)	—	淡褐色	石炭・黄褐色	ナデ・径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R003	
第23図-60	5K030 埴輪彩色土	土師器	坪	(10.4)	2.3	(8.8)	—	褐色	石炭・黄褐色	径32.7㎝	径32.7㎝	底面系	底心	R001	
第23図-61	5K030 埴輪彩色土	土師器	鉢	—	4.8	1.1	1.1	3.4	褐色	石炭・角閃石	—	ナデ	底面系	底心	R004
第23図-62	5K030 埴輪彩色土	土師器	鉢	—	4.8	1.1	1.0	4.8	黄褐色	石炭・角閃石	—	ナデ	底面系	底心	R004
第23図-63	5K030 埴輪彩色土	土師器	鉢	4.0	1.2	1.0	3.6	黄褐色	石炭・黄褐色	—	ナデ	底面系	底心	R006	

第9表 遺構出土遺物観察表②

図録番号	遺構番号	種類	形状	寸法(mm)				色調・紋様	胎土	遺着・遺着		備考	分析項目	時期
				口径 最大径	高さ 最大径	底径 最大径	底面径 最大径			内面	外面			
第2図-21	SK035 埴輪色土	土師器	片	—	2.14	—	—	淡黄白色	石灰・黄褐色	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系		R002
第2図-22	SK035 埴輪色土	土師器	片	11.2	2.7	6.0	—	褐色色	石灰・黄褐色・黒石・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	坪倉	R001
第2図-23	SK035 埴輪色土	瓦葺土器	鉢鉢	—	150+0	(31.0)	—	淡灰白色	石灰・黒石・角閃石	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	A	R004
第2図-24	SK040	土師器	小皿	(8.2)	1.0	(7.8)	—	褐色色	石灰・黄褐色・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R002
第2図-25	SK040	土師器	小皿	(8.4)	1.1	(7.8)	—	褐色色	石灰・黄褐色・赤色胎子・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R003
第2図-26	SK040	土師器	片	(13.8)	2.8	(9.5)	—	淡黄褐色	石灰・角閃石・黄褐色・黄褐色・白色胎子	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	坪倉	A	R001
第2図-27	SK040	埴輪色土	片口鉢	—	3.2+0	—	—	灰色	石灰・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ	倉庫系		R004
第2図-28	SK040/075 灰褐色色土	土師器	小皿	8.4	1.1	6.8	—	にじみ黄褐色	金雲母	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R001
第2図-29	SK040/21	土師器	小皿	(8.2)	1.4	6.4	—	褐色・赤褐色色	白色胎子・赤色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R001
第2図-30	SK040/075 灰褐色色土	埴輪色土	片口鉢	(17.4)	5.5	(7.4)	—	黄褐色	黒石・石灰	32ナシ	32ナシ・灰ナシ	倉庫系		R004
第2図-31	SK040/075 灰褐色色土	石製品	石臼	—	2.3+0	—	—	黄褐色色	—	磨削	—	倉庫系		R005
第2図-32	SK040/204 埴輪色土	土師器	小皿	8.4	1.1	7.0	—	淡黄白色	金雲母・石灰	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R005
第2図-33	SK040/204 埴輪色土	土師器	小皿	8.7	1.1	7.0	—	淡黄白色	黒石・石灰・金雲母	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R004
第2図-34	SK040/204 埴輪色土	土師器	小皿	(8.8)	1.4	(8.4)	—	淡黄白色・淡黄褐色	金雲母・石灰・黒石	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R006
第2図-35	SK040/204 埴輪色土	土師器	片	(11.3)	3.2	(7.3)	—	淡黄白色	金雲母・角閃石・石灰	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	坪倉	A	R002
第2図-36	SK040/204 埴輪色土	土師器	片	13.0	3.4	8.7	—	淡黄白色	角閃石・石灰・金雲母・黒石	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R001
第2図-37	SK040/204 埴輪色土	土師器	片	(13.0)	2.6	(9.2)	—	淡黄白色	黒石・赤色胎子	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R003
第2図-38	SK040/204 埴輪色土	埴輪色土	片口鉢	—	3.0+0	—	—	淡灰白色	黒石・石灰	焼いたナシ	焼いたナシ	倉庫系	小皿A	R006
第2図-39	SK040/204 埴輪色土	埴輪色土	注水×	—	4.8+0	—	—	淡灰白色	黒石・石灰	焼いたナシ	焼いたナシ	倉庫系	小皿A	R006
第2図-40	SK040/204 埴輪色土	埴輪色土	注水×	—	1.2+0	—	—	淡灰白色	黒石	焼いたナシ	焼いたナシ	倉庫系	小皿A	R007
第2図-41	SK045	土師器	片	—	2.0+0	—	—	褐色色	石灰・角閃石・黄褐色・黒石・赤色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ	坪倉		R001
第2図-42	SK045	土製品	土鉢	6.4	1.3	1.1	9.6	淡褐色	石灰・角閃石	—	ナシ	倉庫系		R002
第2図-43	SK045 埴輪色土	埴輪色土	片	—	2.1+0	—	—	青褐色	黒石	焼いたナシ	焼いたナシ	倉庫系	小皿A	R001
第2図-44	SK045 埴輪色土	土師器	片	—	2.2+0	—	—	褐色色	石灰・角閃石・黄褐色	焼いたナシ	焼いたナシ	倉庫系	小皿A	R001
第2図-45	SK050	土師器	小皿	8.5	1.4	6.1	—	褐色色	石灰・角閃石・金雲母・黄褐色・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R001
第2図-46	SK050	土師器	片	(11.1)	3.2	(7.6)	—	淡褐色	石灰・角閃石・黄褐色・赤色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R002
第2図-47	SK050	白磁	片	(10.0)	2.3	(8.1)	—	灰白色	黒石	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R002
第2図-48	SK050 埴輪色土	土師器	小皿	(8.1)	1.4	(5.4)	—	淡褐色	石灰・角閃石・赤色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R006
第2図-49	SK050 埴輪色土	土師器	小皿	8.2	1.4	5.6	—	褐色色	石灰・黄褐色・赤色胎子・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R004
第2図-50	SK050 埴輪色土	土師器	小皿	(8.8)	1.0	(7.8)	—	褐色色	石灰・黄褐色・赤色胎子・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R005
第2図-51	SK050 埴輪色土	土師器	小皿	(8.2)	1.4	(7.0)	—	淡褐色・褐色色	石灰・黄褐色・赤色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R006
第2図-52	SK050 埴輪色土	土師器	片	(12.3)	3.5	7.5	—	淡黄褐色	石灰・角閃石・金雲母・黄褐色・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	坪倉	A	R001
第2図-53	SK050 埴輪色土	土師器	片	(13.2)	3.2	(10.2)	—	褐色色	石灰・黄褐色・赤色胎子・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	坪倉	A	R002
第2図-54	SK050 埴輪色土	土師器	鉢	(10.8)	2.5	—	—	淡灰白色	石灰・黄褐色	ナシ・焼いたナシ	ナシ	倉庫系		R009
第2図-55	SK050 埴輪色土	瓦葺土器	鉢	—	2.6+0	—	—	淡灰白色	石灰	焼いたナシ	焼いたナシ	倉庫系		R011
第2図-56	SK080	土師器	小皿	(8.0)	1.4	6.2	—	にじみ黄褐色	黒石・白色胎子・赤色胎子	ナシ・32ナシ	32ナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R004
第2図-57	SK080	土師器	小皿	(8.6)	1.4	5.8	—	にじみ黄褐色	金雲母	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R003
第2図-58	SK080	土師器	小皿	8.8	1.35	6.4	—	黄褐色	黒石・角閃石・黄褐色・赤色胎子・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R001
第2図-59	SK080	土師器	小皿	8.9	1.35	6.7	—	黄褐色	黒石・角閃石・赤色胎子・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R002
第2図-60	SK080	白磁	片	19.2	3.8	—	—	透明無色	焼いたナシ	焼いたナシ	焼いたナシ	倉庫系	小皿A	R005
第2図-61	SK080 埴輪色土	土師器	小皿	(7.8)	9.7	6.8	—	黄褐色	赤色胎子	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R007
第2図-62	SK080 埴輪色土	土師器	小皿	8.5	1.5	6.0	—	黄褐色	黒石・角閃石・石灰・金雲母・赤色胎子・白色胎子	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R005
第2図-63	SK080 埴輪色土	土師器	小皿	(8.2)	1.4	6.0	—	褐色	石灰・角閃石・石灰・金雲母・赤色胎子・白色胎子	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R006
第2図-64	SK080 埴輪色土	土師器	片	(11.4)	3.9	6.0	—	褐色	角閃石・白色胎子・赤色胎子	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	坪倉	A	R003
第2図-65	SK080 埴輪色土	土師器	片	(12.4)	3.9	6.8	—	にじみ黄褐色	角閃石・白色胎子・赤色胎子・金雲母	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	坪倉	A	R004
第2図-66	SK080 埴輪色土	土師器	片	12.2	4.0	6.1	—	淡黄褐色	石灰・石灰・金雲母・赤色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	坪倉	A	R001
第2図-67	SK080 埴輪色土	土師器	片	12.2	2.8	6.2	—	淡黄褐色	石灰・赤色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	坪倉	A	R002
第2図-68	SK080 埴輪色土	土師器	片	—	1.0+0	(4.5)	—	褐色	石灰・角閃石	ナシ	焼いたナシ・灰ナシ	坪倉	A	R003
第2図-69	SK080 埴輪色土	土師器	鉢	11.0	2.8+0	—	—	淡灰白色	白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ	倉庫系		R006
第2図-70	SK080 埴輪色土	土師器	鉢	—	3.0+0	—	—	淡褐色	石灰・赤色胎子	32ナシ・32ナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R010
第2図-71	SK080 埴輪色土	埴輪色土	鉢	—	2.2+0	—	—	淡黄褐色	黒石	焼いたナシ	焼いたナシ	倉庫系	小皿A	R012
第2図-72	SK080 埴輪色土	埴輪色土	鉢	(16.0)	3.6+0	—	—	青褐色	黒石	焼いたナシ	焼いたナシ	倉庫系	小皿A	R011
第2図-73	SK085	土師器	小皿	(7.8)	1.4	6.0	—	褐色色	石灰・赤石・黄褐色・赤色胎子・白色胎子	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R005
第2図-74	SK085	土師器	小皿	7.7	1.0	5.0	—	褐色色	石灰・黄褐色・赤色胎子	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R006
第2図-75	SK085	土師器	小皿	8.4	1.5	5.2	—	褐色色・褐色色	石灰・黄褐色・黄褐色・赤色胎子・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R008
第2図-76	SK085	土師器	小皿	8.0	1.8	6.0	—	褐色色	石灰・角閃石・金雲母・黄褐色・赤色胎子・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R006
第2図-77	SK085	土師器	小皿	(7.8)	1.8	5.8	—	淡褐色	石灰・角閃石・金雲母・赤色胎子・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	倉庫系	小皿A	R007
第2図-78	SK085	土師器	片	12.7	3.5	6.4	—	淡褐色	石灰・金雲母・黄褐色・赤色胎子・白色胎子	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	坪倉	A	R001
第2図-79	SK085	土師器	片	(12.3)	4.0	7.0	—	淡褐色	石灰・金雲母・黄褐色・赤色胎子・白色胎子	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	坪倉	A	R002
第2図-80	SK085	土師器	片	12.7	3.4	6.2	—	淡褐色	石灰・金雲母・黄褐色・赤色胎子・白色胎子	ナシ・焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	坪倉	A	R003
第2図-81	SK085	土師器	片	(12.7)	3.3	6.4	—	褐色色	石灰・黄褐色・黄褐色・赤色胎子・白色胎子	焼いたナシ	焼いたナシ・灰ナシ	坪倉	A	R004

第10表 遺構出土遺物觀察表③

試験番号	試験科目	種別	書籍	重量(㎏)		丸根/断面径	色調・組織	鑑定士		測定装置		備考	試験時間	備考	
				白根・白根径	中心・太さ			内蔵	外蔵						
第25回-21	SK085	須賀実土製	山口鉢	32.4	7.5	—	灰色	石長・長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系		1012		
第25回-22	SK085	須賀実土製	山口鉢	193.0	87	—	灰色	石長・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	重層系		1013		
第25回-24	SK085 輝緑色土	土師器	山口鉢	6.18	1.6	6.1	—	石長・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1016		
第25回-25	SK085 輝緑色土	土師器	小皿	6.2	1.5	6.2	—	石長・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1017		
第25回-26	SK085 輝緑色土	土師器	小皿	18.1	1.5	16.2	—	石長・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	水切・緑土	小皿A	1020		
第25回-27	SK085 輝緑色土	土師器	小皿	9.2	2.0	7.2	—	石長・角閃石・長石・黄褐色・白色粘土・黄色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	水切・緑土・緑土・緑土	小皿A	1018		
第25回-28	SK085 輝緑色土	土師器	小皿	8.5	1.2	6.8	—	石長・角閃石・長石・黄褐色・赤色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1011		
第25回-29	SK085 輝緑色土	土師器	小皿	8.3	1.5	6.8	—	石長・角閃石・長石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1012		
第25回-30	SK085 輝緑色土	土師器	坪	12.2	3.3	6.8	—	石長・角閃石・黄褐色・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1019		
第25回-31	SK085 輝緑色土	土師器	坪	12.4	3.9	6.0	—	石長・黄褐色・黄褐色・白色粘土・黄色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1018		
第25回-32	SK085 輝緑色土	土師器	坪	12.6	3.9	6.7	—	石長・黄褐色・黄褐色・白色粘土・黄色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1024		
第25回-33	SK085 輝緑色土	土師器	坪	12.0	3.6	9.4	—	石長・角閃石・黄褐色・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1025		
第25回-34	SK085 輝緑色土	須賀実土製	山口鉢	—	3.3~6	—	灰色	石長・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	重層系		1014		
第25回-35	SK085 輝緑色土	須賀実土製	鉢・甕	—	1.0~6	—	褐色・白・褐色・灰色	石長・黄褐色・白色粘土・黄色粘土	ナカバ	ナカバ	自然粘・重層系	小皿A	1014		
第25回-36	SK108	灰黄色土	土師器	小皿	8.2	1.5	5.1	—	黄褐色・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1021	
第25回-37	SK108 灰黄色土	土師器	小皿	13.0	4.5~6	—	黄褐色	石長・黄褐色・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1001		
第25回-38	SK134 灰黄色土	土師器	坪	12.6	3.2	6.2	—	黄褐色	石長・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1001	
第25回-39	SK080 土師器	土師器	小皿	17.2	1.0	16.4	—	黄褐色	石長・角閃石・黄褐色	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1002	
第25回-40	SK080 土師器	土師器	坪	12.5	3.1	19.2	—	石長・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1001		
第25回-41	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	8.1	1.2	7.0	—	黄褐色	石長・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1012	
第25回-42	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	8.1	1.2	7.0	—	黄褐色	石長・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1013	
第25回-43	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	8.5	1.4	6.0	—	黄褐色	石長・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1014	
第25回-44	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	8.4	1.0	7.0	—	黄褐色	石長・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1013	
第25回-45	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	18.2	1.2	6.8	—	黄褐色	石長・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1017	
第25回-46	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	8.1	1.1	6.1	—	淡黄白色	角閃石・石長・長石	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1018	
第25回-47	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	8.9	1.3	6.7	—	淡黄白色	黄褐色・長石	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1019	
第25回-48	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	8.6	1.1	6.9	—	淡黄白色	黄褐色・長石	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1023	
第25回-49	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	8.0	1.2	6.4	—	淡黄白色	黄褐色・石長	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1021	
第25回-50	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	18.0	1.3	17.0	—	淡黄白色	黄褐色・長石	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1022	
第25回-51	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	8.3	1.2	15.0	—	淡黄白色	黄褐色・石長	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1024	
第25回-52	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	18.2	0.9	16.1	—	淡黄白色	黄褐色・長石・角閃石	藤越のあゆみ	藤越のあゆみ・田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1023	
第25回-53	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	8.2	1.9	5.4	—	黄褐色	石長・角閃石・黄褐色・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1018	
第25回-54	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	8.0	2.7	5.2	—	黄褐色	石長・角閃石・黄褐色・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1019	
第25回-55	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	8.4	1.7	6.0	—	黄褐色	石長・角閃石・黄褐色・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1020	
第25回-56	SK080 灰黄色土	土師器	小皿	8.2	2.0	6.3	—	黄褐色	石長・角閃石・黄褐色・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1011	
第25回-57	SK080 灰黄色土	土師器	坪	12.6	3.2	6.6	—	褐色	石長・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1004	
第25回-58	SK080 灰黄色土	土師器	坪	12.0	3.1	19.0	—	黄褐色	石長・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1003	
第25回-59	SK080 灰黄色土	土師器	坪	13.0	2.3	19.1	—	黄褐色	石長・角閃石・黄褐色・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1008	
第25回-60	SK080 灰黄色土	土師器	坪	12.1	3.2	8.4	—	褐色	石長・角閃石・長石・黄褐色・白色粘土・赤色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1001	
第25回-61	SK080 灰黄色土	土師器	坪	12.0	3.5	16.2	—	黄褐色	石長・角閃石・黄褐色・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1027	
第25回-62	SK080 灰黄色土	土師器	坪	12.3	2.8	16.0	—	黄褐色	石長・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1002	
第25回-63	SK080 灰黄色土	土師器	坪	11.8	3.2	9.1	—	黄褐色	石長・角閃石・黄褐色・赤色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1002	
第25回-64	SK080 灰黄色土	土師器	坪	11.9	3.7	16.2	—	黄褐色	石長・角閃石・赤色粘土・白色粘土	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1005	
第25回-65	SK080 灰黄色土	須賀実土製	土皿X3枚	—	2.5	—	黄褐色	緑土	藤越	藤越	藤越		1038		
第25回-66	SK080 灰黄色土	須賀実土製	土皿X3枚	—	3.7~6	—	淡褐色	緑土	藤越	藤越	藤越	満井文	1010	1001	
第25回-67	SK080 灰黄色土	須賀実土製	土皿X3枚	—	2.6~6	—	黄褐色	緑土	藤越	藤越	藤越		1037		
第25回-68	SK080 灰黄色土	須賀実土製	土皿	—	2.5	0.7	3.3	—	—	—	—	森崎通賢	1054年・北宋	1001	
第25回-69	SK080 灰黄色土	銅鏡	—	24	0.6	3.1	—	—	—	—	—	矢野光賢	1023年・北宋	1002	
第26回-1	SK080 雄緑色土	土師器	小皿	6.2	1.5	5.6	—	淡黄白色	長石・角閃石・黄褐色・赤色粘土・白色粘土	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1003	
第26回-2	SK080 雄緑色土	土師器	小皿	6.2	1.5	6.0	—	淡黄白色	黄褐色・石長・角閃石	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1004	
第26回-3	SK080 雄緑色土	土師器	小皿	18.3	1.4	17.2	—	淡黄白色	黄褐色・長石	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1010	
第26回-4	SK080 雄緑色土	土師器	小皿	8.4	1.5	5.9	—	淡黄白色	黄褐色・長石	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1004	
第26回-5	SK080 雄緑色土	土師器	小皿	18.8	1.3	17.1	—	淡黄白色	黄褐色・長石	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	小皿A	1005	
第26回-6	SK080 雄緑色土	土師器	坪	12.7	2.8	8.8	—	淡黄白色	長石・石長・黄褐色	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1002	
第26回-7	SK080 雄緑色土	土師器	坪	12.1	3.5	7.1	—	淡黄白色	黄褐色・長石・角閃石	田嶋ナナ	田嶋ナナ	自然粘・重層系	坪A	1001	
第26回-8	SK080 雄緑色土	瓦葺土器	—	3.1~6	—	—	黄褐色・雄黄色	石長・石長・角閃石	雄方治のり	雄方治のり	雄方治のり	雄方治のり	雄方治のり	雄方治のり	
第26回-9	SK085	鉢釘	92	2.0	2.0	38.4	—	—	—	—	—	—	—	1001	
第26回-10	SK085 雄緑色土	土師器	皿	—	2.0~6	—	褐色	石長・黄褐色	ナナ・田嶋ナナ	ナナ・田嶋ナナ	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	田嶋ナナ	田嶋ナナ	
第26回-11	SK085 雄緑色土	土師器	皿	—	1.9~6	—	淡黄白色	石長・黄褐色	ナナ・田嶋ナナ	ナナ・田嶋ナナ	ナナ・田嶋ナナ	田嶋ナナ	田嶋ナナ	田嶋ナナ	

第11表 道構出土土遺物観察表④

図面番号	遺物番号	種類	群別	法量(cm)				色調・質感	胎土	調査・施設		備考	分館時期	写真		
				口径/最大径	底径/最大径	通径/最大径	口縁/底縁			内面	外面					
第2602-12	50065	磁褐色土	瓦葺土器	火鉢	2.8×0	—	—	褐色色	石灰・黒色胎子・褐色胎子	ナデ	ナデ・シラナデ	—	—	R004		
第2602-12	50065	磁褐色土	瓦葺土器	火鉢	—	3.9	—	褐色色	石灰	ナデ	ナデ・シラナデ	—	—	R005		
第2604-14	50065	磁褐色土	瓦葺土器	鉢	—	4.5×0	—	淡灰白色	白色胎子・褐色胎子	ナメ方陶土の付着	ナメ方陶土の付着	—	—	R006		
第2604-15	50065	磁褐色土	瓦葺土器	碗	—	2.9×0	—	淡褐色	緑釉	施釉	施釉・黒釉	—	小野E	R010		
第2604-16	50065	磁褐色土	瓦葺土器	鉢	—	5.9×0	—	淡褐色	緑釉	施釉	施釉・黒釉	—	—	R010		
第2604-17	50065	磁褐色土	瓦葺土器	鉢	—	3.9×0	—	淡褐色	石灰・白色胎子	施釉ナデ	施釉ナデ	—	—	R012		
第2604-18	50065	磁褐色土	瓦葺土器	鉢	(28.4)	12.0	(31.8)	—	淡褐色	施釉ナデ・自然釉	施釉ナデ・自然釉	—	—	R011		
第2604-19	50065	磁褐色土	瓦葺土器	中皿	8.6×0	10.8×0	1.1	—	淡褐色	白色胎子・褐色胎子	工素ナデ	工素ナデ	—	R014		
第2604-20	50065	磁褐色土	瓦葺土器	中皿	30.4	12.9	1.5	—	淡褐色	角閃石・白色胎子	工素ナデ	工素ナデナデ	—	R013		
第2604-21	50065	磁褐色土	瓦葺土器	中皿	—	1.1×0	—	淡褐色	長石・褐色胎子	ナデ	ナデナデ・角閃石	—	—	R001		
第2604-22	50065	磁褐色土	瓦葺土器	中皿	—	(12.0)	3.7×0	—	淡褐色	長石・褐色胎子	ナデナデ	ナデナデ・角閃石	—	R002		
第2604-23	50065	磁褐色土	瓦葺土器	中皿	8.6×0	10.7×0	1.0	—	淡褐色	白色胎子・褐色胎子	工素ナデ	工素ナデ	—	R003		
第2604-24	50065	磁褐色土	瓦葺土器	中皿	8.2×0	10.7×0	1.0	—	淡褐色	長石・白色胎子	ナデ・工素ナデ	ナデ・工素ナデ・角閃石	注文が、有償依頼	R004		
第2604-25	50065	磁褐色土	瓦葺土器	鉢	不明	2.8	3.6	0.9×0	9.5	—	—	—	—	R002		
第2604-26	50065	磁褐色土	瓦葺土器	鉢	5.7	1.5	1.5	13.9	—	—	—	—	—	R001		
第2604-27	50065/50161	上層	瓦葺土器	碗	—	4.7×0	—	赤褐色	白色胎子・褐色胎子	ナデ・ナメ方・ナメ方ナデ	ナメ方ナデ	—	—	R001		
第2604-28	50065/50161	上層	瓦葺土器	大皿	—	7.3×0	—	赤褐色	—	ナメ方ナデ	ナメ方ナデ	—	—	R002		
第2604-29	50022	瓦褐色土	土器	小皿	(7.8)	1.1	(9.0)	—	淡灰白色	角閃石・石灰	施釉ナデ	施釉ナデ・施釉胎子	—	小皿A	R002	
第2604-30	50022	瓦褐色土	土器	小皿	—	1.4	—	淡灰白色	角閃石	施釉ナデ	施釉ナデ・施釉胎子	—	—	小皿A	R003	
第2604-31	50022	瓦褐色土	土器	洋	—	4.6×0	—	淡褐色	赤色胎子・石灰	施釉ナデ	施釉ナデ・施釉胎子	—	—	洋A	R001	
第2604-32	50022	瓦褐色土	土器	洋	—	2.7×0	—	淡灰白色	石灰・角閃石	ナメ方ナデ	ナメ方ナデ	—	—	R004		
第2604-33	50017	銅鍍	銅鍍	—	2.4	0.7	1.2	—	—	—	—	—	—	R002		
第2604-34	50023	赤灰土	土器	皿	11.8	2.6	—	淡灰白色	角閃石・砂粒少ない	ナデ・角閃石ナデ・施釉ナデ	施釉ナデ・角閃石ナデ	内面ナデ・上げ底あり	—	古C	R001	
第2604-35	50074	白磁	磁	—	3.3×0	—	—	淡灰白色	—	施釉	施釉	大車庫ナデ	—	古C	R001	
第2604-36	50074	土器	皿	(142)	2.5×0	(1.8)	—	淡灰白色	石灰・角閃石・褐色胎子・褐色胎子	ナデ・角閃石ナデ・施釉ナデ	施釉ナデ・角閃石ナデ	京都系	—	古C	R001	
第2604-37	50087	土器	皿	(15.0)	3.0×0	—	—	淡灰白色	石灰・角閃石・褐色胎子	ナデ・角閃石ナデ・施釉ナデ	施釉ナデ・角閃石ナデ	京都系	—	古C	R002	
第2604-38	50087	瓦葺土器	碗	—	3.2×0	—	—	淡褐色	石灰・角閃石・褐色胎子	施釉ナデ	施釉ナデ	—	—	古C	R003	
第2604-39	50191	赤灰土	土器	皿	—	3.1×0	—	淡灰白色	石灰・角閃石	ナメ方ナデ	ナメ方ナデ・角閃石ナデ	京都系	—	古C	R001	
第2604-40	50234	褐色土	土器	洋	—	3.1×0	—	淡灰白色	長石・石灰・金象母	施釉ナデ	施釉ナデ・施釉胎子	—	—	洋A	R001	
第2604-41	50234	褐色土	土器	鉢	11.3	6.1	4.0	300.8	—	—	—	—	—	—	R002	
第27-1	50141	土器	小皿	(32)	1.2	(7.6)	—	褐色色	石灰・褐色胎子・褐色胎子	ナデ・施釉ナデ	施釉ナデ・角閃石ナデ	—	小皿A	R002		
第27-2	50141	土器	洋	—	1.0×0	6.9	—	褐色色	石灰・長石・褐色胎子・褐色胎子	ナデ・施釉ナデ	施釉ナデ・角閃石ナデ	—	—	洋A	R001	
第27-3	50141	土器	鉢	(10.0)	3.4	3.8	—	淡灰白色	石灰・褐色胎子	ナデ	角閃石ナデ・角閃石ナデ	—	—	古C	R003	
第27-4	2	黄褐色土	土器	洋	—	0.9×0	7.0	—	淡灰白色	金象母・石灰・長石	施釉ナデナデ	施釉ナデ・施釉胎子	—	—	洋A	R001
第27-5	2	黄褐色土	土器	洋	—	3.8×0	—	淡灰白色	金象母・石灰	施釉ナデナデ	施釉ナデ・角閃石ナデ	—	—	R002	R002	
第27-6	2	黄褐色土	土器	小皿	—	1.0×0	—	淡褐色	角閃石・石灰・長石	施釉ナデ	施釉ナデ・施釉胎子	—	—	小皿A	R002	
第27-7	2	黄褐色土	土器	洋	—	1.2×0	(6.6)	—	淡灰白色	長石・石灰・角閃石・金象母	施釉ナデ	施釉ナデ・施釉胎子	—	—	洋A	R001
第27-8	2	黄褐色土	土器	洋	—	3.0	—	褐色	角閃石・長石・赤色胎子を含む砂粒多い	施釉ナデ	施釉ナデ・施釉胎子	—	—	京都系	R005	
第27-9	2	黄褐色土	土器	洋	—	7.4×0	—	淡褐色	石灰・長石・褐色胎子	ナメ方ナデ	ナメ方ナデ・角閃石ナデ	—	—	京都系	R001	
第27-10	2	黄褐色土	土器	洋	—	1.8×0	—	淡褐色	緑釉	施釉	施釉	—	—	R012	R012	
第27-11	2	黄褐色土	土器	洋	—	1.7×0	—	青褐色	緑釉・褐色胎子	施釉	施釉	内外側に黄入あり	—	R011	R011	
第27-12	2	黄褐色土	土器	洋	122	2.8	5.1	—	淡褐色	緑釉	施釉	施釉・黒釉	—	—	大車庫直	R002
第27-13	2	黄褐色土	土器	洋	—	2.5×0	—	淡褐色	緑釉	施釉	施釉	—	—	上田田	R013	
第27-14	2	黄褐色土	土器	洋	—	2.4	0.7	2.3	—	—	—	—	—	—	皇立通算	R001
第27-15	2	黄褐色土	土器	洋	—	2.0×0	—	淡白色	褐色の微粒子を含む淡白色	施釉・黒釉	施釉	—	—	大車庫直	R005	
第27-16	2	黄褐色土	土器	洋	—	2.1×0	—	淡褐色	緑釉	施釉	施釉	—	—	上田田	R002	
第27-17	2	黄褐色土	土器	洋	—	4.0×0	—	淡褐色	緑釉・褐色胎子	施釉	施釉	—	—	R003	R003	
第27-18	2	黄褐色土	土器	洋	—	1.5×0	(4.2)	—	淡褐色	緑釉・褐色胎子	施釉	施釉・黒釉	—	—	高台のみ	R004
第27-19	2	黄褐色土	土器	洋	—	2.3	0.7	3.2	—	—	—	—	—	—	元宮通算	R001
第27-20	2	黄褐色土	土器	洋	—	2.4	0.7	2.6	—	—	—	—	—	—	元宮通算	R002
第27-21	2	黄褐色土	土器	洋	—	2.8×0	—	淡褐色	緑釉	施釉	施釉・緑釉	—	—	上田田	R002	
第27-22	2	黄褐色土	土器	洋	—	2.3×0	—	淡灰白色	緑釉	施釉	施釉	—	—	大車庫直	R003	
第27-23	2	黄褐色土	土器	洋	—	2.0×0	—	淡灰白色	緑釉	施釉	施釉	—	—	—	古C	R004
第27-24	2	黄褐色土	土器	小皿	(30)	2.4	5.0	—	褐色色	長石	施釉ナデ・角閃石ナデ	施釉ナデ・角閃石ナデ	—	—	小車庫	R001
第27-25	2	黄褐色土	土器	小皿	13.0	2.2	—	褐色色	長石	ナメ方ナデ・ナメ方ナデ	ナメ方ナデ・ナメ方ナデ	内面ナデ・上げ底あり	—	—	古C	R001
第27-26	2	黄褐色土	土器	小皿	—	1.1×0	5.2	—	淡褐色	緑釉	施釉	施釉	—	—	大車庫直	R002
第27-27	2	黄褐色土	土器	小皿	2.3×0	—	2.0×0	—	淡褐色	白色胎子・褐色胎子	工素ナデ	ナデ・工素ナデ	—	—	—	R002

第IV章 総括

本調査の報告を終えるにあたり、時期別の遺構変遷を整理し、周辺調査の結果とあわせて「御北町」の様相について検討を行うことで総括とする。

第1節 時期別の遺構変遷

町112次調査区では整地層を挟んで遺構面を2面確認した。整地層よりも上層を第1遺構面、下層を第2遺構面とする。第2遺構面の地形は、東側から西側へと緩やかに傾斜しており、調査区の東端と西端の遺構検出面の高低差は0.4m前後を計る。この第2遺構面の上に整地層が認められる。調査区東側の整地層の厚さは0.1～0.2m前後であるのに対し、中央から西側にかけては0.3～0.5m前後と整地層が厚くなっており、第1遺構面はこの整地層による盛土によって平坦な地形になっており、14世紀前葉～16世紀後葉の遺構が検出された。以上から、調査区内で見られる整地は、14世紀前葉に行われたものであると考えられる。そのため、14世紀前葉の遺構は、整地前後に分けて時期別変遷に反映している。

I期：14世紀前葉（整地以前）

I期とした遺構は、14世紀前葉の遺構のうち、第2遺構面で検出されたものである。遺構は調査区の東側に分布しており、廃棄土坑と溝状遺構がある。

すべての遺構で、14世紀前葉段階の土師器環A・小皿Aが出土遺物の多くを占めている。また、吉備系の土師器椀や東播磨系の須恵質土器片口鉢、龍泉窯系青磁碗（上田B類）、白磁皿（大宰府IX類）といった、外部から搬入されたものも少量ではあるが出土している。廃棄土坑で出土した遺物のうち、個体が識別可能な環Aと小皿Aの数は破片も含めると、SK080で環A46点・小皿A18点、SK085では環A58点・小皿A17点と、どちらも環Aが小皿Aよりも多く出土している。遺物組成は、万寿寺南側の調査である中世大友府内町跡第30次調査の14世紀前葉の廃棄土坑（SK115）から出土したセットと類似しており、大友氏館跡の北側では類例の少ない時期の遺物群である。土師器を一括廃棄した土坑の存在から武家地等の一部である可能性があるが、遺構数の少なさから断定することはできない。

II期：14世紀前葉（整地以後）～15世紀後葉

調査区の第1遺構面に展開する遺構群である。遺構は調査区全体に散漫に分布している。遺構は廃棄土坑や溝状遺構があるが、生活の痕跡は見られず、出土遺物の多くは在地系土師器が占めている。整地後、15世紀後葉までの遺構は極めて少なく、生活用具もほとんど出土していないことから空地として使われていたと考えられる。

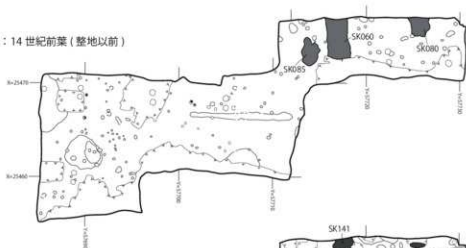
III期：15世紀末葉～16世紀前葉

調査区の第1遺構面に展開する遺構群である。遺構間の切り合いや出土遺物から、前後の段階の遺構と区別した。

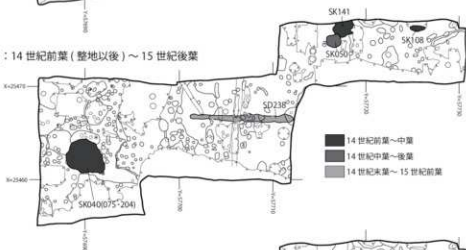
遺構は調査区の中央から西側にかけて分布しており、掘立柱建物跡は調査区の西壁に面している。2棟の掘立柱建物跡の桁行は東西を指向しており、その東側にある井戸跡SE070と一つの区画を形成していたと考えられる。掘立柱建物跡SB100の西端から井戸跡の東端までは、約22mの距離がある。建物と井戸の間の空間には、同時期の遺構はいくつかのピットがあるだけで、遺構はほとんど見られないため空地であったと考えられる。ほぼ同じ場所に建てられた2棟の掘立柱建物跡は建て替えの可能性がある。掘立柱建物跡の周辺の廃棄土坑群からは、土師器の環や小皿のほか、瓦質土器・土師質土器の鍋や火鉢、土鍾、鉄釘、瓦などが出土している。

出土遺物の組成を、実測を行った以外の選別遺物も加えて破片を計数したところ、在地系土師器が出土量の多

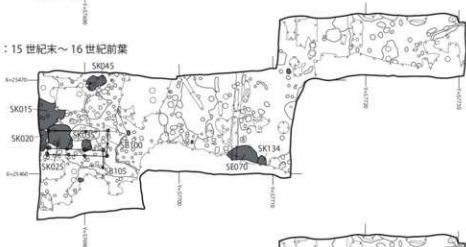
I期：14世紀前葉（整地以前）



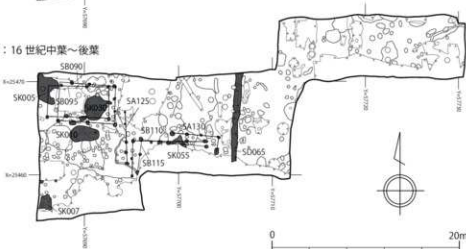
II期：14世紀前葉（整地以後）～15世紀後葉



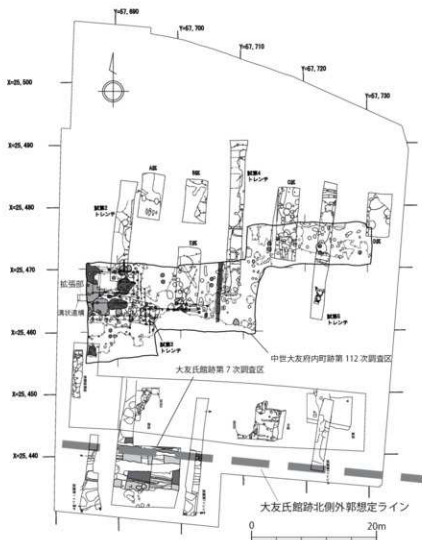
III期：15世紀末～16世紀前葉



IV期：16世紀中葉～後葉



第28図 時期別遺構変遷図(1/400)



第 29 図 周辺遺構分布図 (1/600)



第 30 図 調査区周辺模式図

くの割合を占めており、その他の陶磁器類や瓦質・土師質土器はきわめて少ないことがわかった。

桁行の方向からSB100・105は、西側あるいは東側を正面として、道路あるいは土地の境界を示す区画溝を意識していることが想定された。その確認のために行った調査区西側の拡張部では、整地層上面から掘り込まれた溝状遺構が土層断面で見つかり、建物は南北の区画を意識している可能性が高い。

以上から調査区西側では、遺物組成のあり方や建物遺構や井戸跡の存在から、空閑地として利用されていたⅡ期までのあり方とは異なる土地利用が行われていたと推定される。

Ⅳ期：16世紀中葉～後葉

Ⅲ期から引き続き、遺構の切り合いや出土遺物の内容から判断した。当期の遺構は調査区の南北を縦断する溝状遺構SD065より西側に展開している。区画溝と思われるSD065や2列の櫓跡の他、4棟の掘立柱建物跡、複数の廃棄土坑、ピット群からなる。掘立柱建物跡は2棟の建物跡が重なって検出されており、建て替えの可能性が考えられる。建物の桁行は前段階と同じく東西を指向しており、建物も軸はほぼ東西を向いているSB110を除いてN-83°～88°-Wとなっており、N-4°-Eの傾きを持った溝状遺構SD065を意識しているものと思われる。また2列の櫓跡(SA125・130)は、掘立柱建物跡(SB110・115)の周囲を囲むように配されており、より小さな区画の意識が見てとれる。溝状遺構SD065が井戸跡SE070を切っており、Ⅳ期にⅢ期の土地利用のあり方を改変するような再開発が行われたと考えられる。出土遺物の組成は、前段階と変わらず在地の土師器が多くを占めている。

町112次調査区内の遺構の時期的な変遷は、大友氏館成立以前の14世紀前葉に整地が行われてから(Ⅰ期)、15世紀後葉まで散発的に遺構が形成されながら空閑地として使用され(Ⅱ期)、15世紀末葉には掘立柱建物跡や井戸跡が作られ生活の場としての利用が始まり(Ⅲ期)、16世紀後葉に区画の改変を伴う再開発が行われる(Ⅳ期)という4つの段階にまとめられる。ただし、Ⅲ期以後、遺構は調査区の西側に集中して分布しており、東側は空閑地として利用されていたと思われる。

第2節 周辺調査区との比較

「府内古図」によると町112次調査区は「御北町」に位置する場所となっている。御北町は大友氏館の北側に隣接しており、第2南北街路と第4南北街路の間に立地している。「府内古図」には大友氏館北側に東西の道が描かれており、御北町は南側を正面とする開口を持っていると考えられる。

町112次調査区の南側では、中世大友府内町跡第15次調査と大友氏館跡第7次調査が行われている。大友氏館跡第7次調査(以下、館7次)では、大友氏館の北側外郭施設と思われる溝状遺構と積土遺構が確認されている。溝状遺構は積土遺構を挟むように2条1組で3つの段階のものがある。溝状遺構や積土遺構に伴う整地は16世紀に行われたと報告されている。中世大友府内町跡第15次調査(以下、町15次)は、今回の調査と同じく御北町の様相の把握を目的として行われ、館7次調査区から延長される溝状遺構や生活の痕跡を示す廃棄土坑・ピット群が確認された。しかし、カクランによって多くの遺構が壊されており、「府内古図」に描かれた大友氏館北側の東西道路や掘立柱建物跡などの面的な遺構の把握は困難であった。

町112次調査区内やその周辺で行われた発掘調査では、「府内古図」にみられる大友氏館の北側を通っている東西道路の存在を示す遺構は確認されていない。今回確認されたⅢ・Ⅳ期の掘立柱建物跡の桁行は東西方向を指向しており、SD065や西側拡張部で確認された溝状遺構のような南北方向の区画を意識して建設されたと考えられる。特にⅣ期の掘立柱建物跡や櫓跡の方向は、その建設にあたって区画溝と思われるSD065を意識したものである。町112次調査区よりも南側に設定された町15次調査区では、館の北側外郭施設との境界付近に砂質土と粘質土を交互に積み重ねて作られる道路遺構は確認されていない。

館7次調査で確認された16世紀中葉から後葉に位置づけられる溝状遺構SD041から、ほぼ同時期の掘立柱

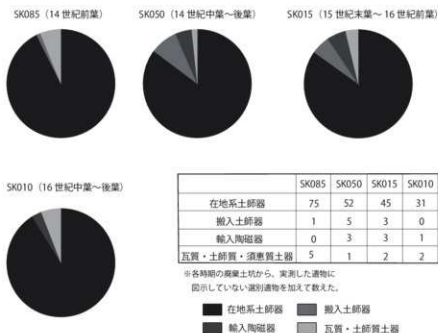
建物跡 SB115 の南端 (115a) までは約 17 m の距離があり、道路があったことを想定するのに十分な空間が存在している。以上のことから、大友氏館北側の東西道路は存在していなかったか、存在していても第 2 南北街路などの主要道路で見られるような明確な版築構造を伴わない簡易な構造の道路であった可能性が考えられる。

第 3 節 まとめ

今回の調査地点は、「府内古図」によると「御北町」付近に相当する。結果として、土層断面の観察と遺構の時期的な変遷の検討から 14 世紀前葉に整地が行われて空地として使用された後、15 世紀末葉頃に活発な土地の利用がはじまると解釈できる調査所見を得た。主要な遺構として、14 世紀前葉の土師器を一括廃棄した廃棄土坑や溝状遺構、15 世紀末葉～16 世紀後葉の掘立柱建物跡、柵跡、井戸跡、溝状遺構などがある。

出土遺物は在地系土師器が一貫して大きな割合を占めており、輸入陶磁器類や生活用具と思われる土師質土器・瓦質土器の量は極めて少ないという特徴を示している。中世大友府内町跡第 4 次調査では、上市町の廃棄土坑から出土した遺物の組成が報告されており、16 世紀後葉から末の遺構では在地の土師器類の割合は 9～16% と低いことが分かっている。遺物組成からは、「御北町」と推定される町 112 次調査区内の遺構群は、町屋とは異なる武家地、あるいは寺社地などに属する可能性が指摘できる。

掘立柱建物の桁行が東西を指向していることや南北に走る溝状遺構から、調査区内の遺構は南北の区画を意識していることが分かった。東西道路の北側に位置する「御北町」の建物は南北に指向する桁行を持つ構造であったと考えられ、本調査区内で検出された南北溝 (SD065) より西側の遺構群は「御北町」ではなく、「府内古図」に記された「下町」に属する可能性も指摘できる。今後の調査の課題としてあげられる。



第 31 図 各時期遺物組成

【第 IV 章 参考文献】

- 上野淳也 2000 「XIV 大友氏館跡第 7 次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 Vol.12』大分市教育委員会
 河野史郎 2002 「V まとめ 3. 出土遺物の組成変化について」『大友府内 4』大分市教育委員会
 佐藤道文 2015 「第三章 調査の成果 第 3 節 遺構 ①北地区の調査」『大友氏館跡 1』大分市教育委員会
 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2010 『豊後府内 14』大分市教育委員会
 大分市教育委員会 2004 『大友府内 3』



調査区遠景（北西より）



第1面調査区全景（上が南）



第1面調査区西側ビット群完掘状況（上が南）



第1面調査区東側全体遺構写真（西より）



第1面調査区中央西側全体遺構写真（東より）



第2面調査区東側全体遺構写真（西より）

写真図版 4



第2面調査区西側ピット群完掘状況（南より）



第2面調査区中央西側全体遺構写真（東より）



SE070 東西土層 (南より)



SE070 掘削状況 (南より)



SK005 完掘状況 (東より)



SK010 完掘状況 (北より)



SK015 完掘状況 (東より)



SK020 遺物出土状況 (東より)



SK025 完掘状況 (北より)



SK030 完掘状況 (南より)

写真図版 6



SK035 遺物出土状況（北より）



SK035 完掘状況（北より）



SK040 (075・204) 検出状況（南より）



SK040 (204) 検出状況（東より）



SK040 (075・204) 東西土層（南より）



SK040 (204) 東西土層（南より）



SK040 (204) 遺物出土状況近景（南より）



SK040 (075) 完掘状況（東より）



SK045 完掘状況 (南より)



SK050 完掘状況 (南より)



SD060 検出状況 (南より)



SD060 東西土層 (南より)



SD060 完掘状況 (南より)



SD065・SE070 検出状況近景 (南より)



SD065・SE070 検出状況近景 (南より)



SD065 北側ベルト東西土層 (南より)

写真図版 8



SD065 南ベルト東西土層 (南より)



SD065 完掘状況 (南より)



SK080 検出状況 (南より)



SK080 遺物出土状況 (南より)



SK085 検出状況 (西より)



SK085 遺物出土状況 (西より)



SK085 中央・南側遺物出土状況近景 (西より)



SK085 完掘状況 (西より)



調査区中央北壁面東西土層 (南より)



調査区西側西壁面南北土層 (東より)



調査区西側西壁面南北土層近景 1 (東より)



調査区西側西壁面南北土層近景 2 (東より)



調査区西側西壁面南北土層近景 3 (東より)



調査区東側北壁面東西土層 (南より)



調査区西側拡張部全景 (東より)



調査区西側拡張部北壁面東西土層 (南より)

写真図版 10



第23図-7



第23図-18



第23図-26



第23図-28



第23図-35



第23図-43 外面



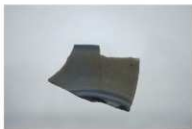
第23図-43 内面



第24図-1



第24図-9 外面



第24図-9 内面



第24図-15



第24図-22



第24図-23



第24図-28



第24図-30



第24図-31



第24図-47 外面



第24図-47 内面



第 24 図 -58



第 24 図 -59



第 25 図 -2



第 25 図 -6



第 25 図 -12



第 25 図 -24



第 25 図 -25



第 25 図 -30



第 25 図 -31



第 25 図 -41



第 25 図 -42



第 25 図 -44



第 25 図 -54



第 25 図 -55



第 25 図 -56



第 25 図 -59



第 25 図 -60



第 25 図 -61

写真図版 12



第 25 図 -66



第 26 図 -6



第 26 図 -7



第 26 図 -15 外面



第 26 図 -15 内面



第 26 図 -16



第 26 図 -17



第 26 図 -23



第 27 図 -3



第 27 図 -8



第 27 図 -11



第 27 図 -12 外面



第 27 図 -12 内面



第 27 図 -21



第 27 図 -22



第 27 図 -24



第 27 図 -26



第 27 図 -27

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおとふふない						
書名	大友府内23						
副書名	中世大友府内町跡第112次調査 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第142集						
編著者名	施道千太郎 留野優兵 株式会社 九州文化財総合研究所(業務責任者 井上素裕)						
編集機関	大分市教育委員会						
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL(097)534-6111(代表) FAX(097)536-0435						
発行年月日	西暦2016年3月25日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積㎡	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
ちゅうせいのふりがな 中世大友府内町跡	おおとふふないまち 中世大友府内町跡	44201	201051	33° 13' 53"	131° 37' 00"	20150714～20150930	522.4
所収遺跡名	類別	主な時代	主な遺構			主な遺物	
中世大友府内町跡	都市	中世	創立柱建物跡・廃土土坑・溝状遺構・井戸跡・土坑・ピット群			土師器 瓦質土器 土師瓦土器 中国青花 中国陶磁器 備前陶器 中世須恵器	
特記事項							
要約	本書は、平成27年度に実施した中世大友府内町跡第112次調査区の調査成果を所収したものである。調査地点は「府内古蹟」の標定「御土町」に当たる場所。過去の調査では南側に大友氏邸の北堀外堀調査とみられる積土状遺構が確認されている。調査の結果、主に14世紀前期と15世紀末葉から16世紀後葉にかけての遺構が確認された。14世紀前半の遺構には、溝状遺構と土師器の一括廃棄土坑がある。当該時期の遺構は周辺の調査では未だの確認されておらず、大友期成立以前の遺構群として注目される。15世紀末葉から16世紀後葉の遺構として、創立柱建物跡、堀跡、井戸跡、溝状遺構、ピット群がある。調査区中央の南北に軸を持つ溝状遺構を境に、調査区西側に遺構は集中する。創立柱建物跡は桁行が東西方向を向っており、建物の建て替えが確認できる。出土遺物は土師器の坏、小皿が多数を占めており、輸入陶磁器や土師瓦土器、瓦質土器は少ない。						

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第142集

大友府内23

中世大友府内町跡第112次調査

— 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2016年3月25日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2-31